
IS&It;CROSS WING>

TOMATOMAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS>CROSS WING<

【Nコード】

N7967W

【作者名】

TOMATOMAN

【あらすじ】

世界最強の兵器 IS・インフィニティストラトス。
そのコアは篠ノ之 束しか作れない。
しかしその裏で一つの企業が動こうとしていた。
そしてIS学園に四人の男女が現れる。

作者は初めて小説を書く人間です。どうか暖かい目で見守ってやって下さい。
誤字脱字や感想などございましたらお願いします。

第0話 プロローグ（前書き）

どうも。TOMATOMANです。頑張っていきたいと思っていますのでよろしくお願いします。

第0話 プロローグ

《-IS-インフィニットストラトス》

それは篠ノ之 束が、世界に新たに生み出したマルチフォーム・スーツである。

元々は宇宙空間での活動を想定されて作られた物であったが、その圧倒的な性能により兵器への転用が危ぶまれ《アラスカ条約》によってそれを禁止とした。

現在では競技、スポーツとして扱われている。

しかし、この《IS》には大きな欠陥がある。

それは、女性にしか扱えないことだ。

そのため、女性「IS」を使える「重要な戦力、という構図が出来、その結果どの国も女性を優遇するようになり女尊男卑社会が出来上がった。

また、《IS》の中心に使われているコアは完全なブラックボックスとなつているため、現在《IS》は篠ノ之博士が作ったコアを使った467機しか存在しない。

しかし少なくともそれは表の話。

誰も知らない、多分あの篠ノ之 束すら知らない裏で、
つ目のコアが水面下で密かに完成していた。
468

《クロスウィング社》

それがそのコアを開発した組織。

そして第二世代型ISの開発が中盤に差し掛かる頃、誰も知らない《C W (Cross, Wing) - 0000》と名付けられたコアと共に表の世界から姿を消した。

そして三年後

IS学園正面ゲート前

夕焼けに染まるそこには四つの影があつた。

それは、

一人は期待に胸を膨らませる様な笑顔

一人は何かを考えている様な悩んだ顔

一人はこれからの事を見つめる様な不安な顔

そして一人は明らかに面倒臭そうな顔

をした四人の男女のものであった。

これはIS学園入学式三日前の出来事である。

第0話 プロローグ（後書き）

当時のクロスウィングは束さんにとってはOUT OF 眼中だったので、表から消えても築気付きませんでした。

誤字脱字や感想などございましたらお願いします。

設定？

- 設定 -

ショウ・フルゴール

年齢：15歳

誕生日：9月 27日

身長：175cm

体重：64kg

好きな事・物：ゴロゴロと寛ぐ

昼寝（→とは違う）

白熱するもの

タコ焼き

嫌いな事・物：面倒なこと

仲間を馬鹿にされること

熱いもの（猫舌&猫手）

甘すぎるもの

《クロスウィング》に所属する者の一人。

面倒な事を嫌うがやる時はやる。また、本気になった時の力は凄まじい。

名前は外国人っぽいが遺伝子的には思いつ切り日本人。

レイとは小さい時から、ミライと炎璃とは小学校からの幼なじみ。

両親は旧クロスウィング社の研究員及びテストパイロット、現クロスウィングの研究員長及びテストパイロット。

中学校に上がってから、ISの適性があることからテストパイロットとなる。

今まではその事を隠していたが、織斑 一夏の出現により幼なじみ三人と共にIS学園に入学する。

家に代々続く《大輪流剣術》

（守の型が無く、ひたすら攻めるといふ思想の流派）

というものがあつた中でも力と手数を重視する《双刀流》と、技を重視する《一刀流》があるが、どちらも修得している。

（個人的には双刀流をよく使う。）

過去にレイと一緒に一度だけ大会に出たことがあり（筈が転校して出られなかつた大会）、男子の部で優勝している。（実は準決勝で一夏と戦っている。）

そのため生身は勿論、IS戦でも接近戦では無類の強さを誇る。

（本気状態）

しかし、その分遠距離戦は苦手。本人曰く弾は避けれるが、近付くのが苦手。

（砲撃している相手に近付くという点では一夏以下かもしれない。）

負けはしないが勝てもしない。

AICには非常に相性が悪く、戦術が、「剣を投げ、それに瞬間加速で追い付き同時攻撃」しかない。
ツシヨン・フースト

実は偽名。

レイ・イフリート

年齢：15歳

誕生日：10月 1日

身長：162.5cm

バストサイズ：Dカップの中〜下くらい

好きな事・物：体を動かす事

甘いもの

かわいいもの

嫌いな事・物：怖い事（少し）

仲間の理の通ってない悪口

辛過ぎるもの

《クロスウィング》に所属する者の一人。

シヨウと同じく日本人。

基本的には真面目でしっかりしてるがよくわからないところで何処か抜けている。

小さい頃から一緒だったシヨウに好意を寄せているが、本人もあまりよくわかってない様子。

シヨウとは小さい時から、ミライと炎璃とは小学校からの幼なじみ。

両親は旧クロスウィング社からの幹部及びテストパイロット。

三人とは家族ぐるみで仲がいい。

小学生の時からIS適性が高かったため、テストパイロットをしていた。

また、《大輪流剣術》の《一刀流》を修得している。

過去にシヨウと一緒に一度だけ大会に出場したことがあり、女子の部で優勝している。

経験の多さから操縦はかなり上手く、強い。

苦手な距離は特に無く安定している。

実は偽名。

ミライ・タスク・シュバルツ

年齢：15歳

誕生日：6月 23日

身長：181cm

体重：67kg

好きな事・物：スポーツ

屋台（射的）

涼しい所

嫌いな事・物：暑い所

誰かの威を借りている人間

見下す人間

《クロスウィング》に所属する者の一人。

白人で金髪

基本クールで冷静であるが、意外と熱血な一面ももつ。

炎璃とは小学校に上がる少し前から、ショウ、レイとは小学校からの幼なじみ。

両親ともにクロスウィングのリーダー及び幹部。

ショウと同じく、中学生のころからISの適性を発見しテストパイロットとなる。

銃の扱いに長けており、腕はかなりのもの。

（祭りの夜店の射的は絶好のたかり場。かなりの精度+値段が高い物狙いだつたため、最終的には「ミライ君のみ弾の数半減」などと

書かれるようになった。）

この技術はIS戦にも大いに役立っており、場を軽く支配出来る。

剣の扱いは苦手だが、父から銃衝術を学んでおり、全ての距離（しかも銃で）に対応している。

実は偽名。

皇^{こう} 炎璃^{えんり}

年齢：15歳

誕生日：2月 11日

身長：158cm

バストサイズ：Bに近いくらい

好きな事・物：読者

テレビ

静かな所

嫌いな事・物：煩い所

陰口（嫌いより怖いって感じ）

冷たいもの（嫌いより苦手って感じ）

《クロスウィング》に所属する者の一人。

中国人だけど九割は和の心。

静かな性格。けど意志が強い。

両親が研究職だった事から家に本が沢山あり、友人達からは「図書館」と称されていた。

ミライとは小学校に上がる少し前から、ショウ、レイとは小学校からの幼なじみ。

両親は旧クロスウィング社からの研究員。

レイと同じくISの適性が高く、小学生の頃からテストパイロットとなる。

母が槍術、ランスの扱いに長けており、ISを操縦するにあたって教えもらった。

静かな性格からは考えられない力押しな戦いをする。

実は偽名。

クロスウイング

元々は、「クロスウイング社」。

ISの特殊武装などを開発していた企業。

しかし秘密裏にコアの研究が進められていて最初のコアの製造完了後、世界の混乱を防ぐために表社会から消えていったが、実際は裏で極秘に活動していた。そのため、あの織斑 千冬や篠ノ之束でさえも存在を知らなかった。コアの製造や、独自のエネルギー回路システム《NDシステム（Neo Drive System）》など非常に高い技術を持っている。

実は国際IS委員会の最高議会と繋がっている。

設定？（後書き）

いま見た目のイメージ考えてます。そのうち投稿したいと思います。

IS設定？

クロスウィング製 - 第三世代 -

《NDシステム(Neo Drive SYSTEM)》

第二世代機から試験的に研究され、第三世代機から実際に導入されたエネルギー循環システム。

主な特徴として、機体のエネルギー回路を全て見直し、独自の解釈を適用させる事によって、エネルギー効率が上がった事。

また、このシステム最大稼働時にはバックパックからエネルギーケーブルが延び、武装に直結させる事によって、莫大なエネルギーを使用する事が出来る。

コバルト・ブレイド

コア：CW - 0001

パイロット：ショウ・フルゴール

武装：『コバルト・セブン・ソード』

○近接ブレード『コバルト・ソード』×2

○近接エネルギーブレード『コバルト・サーベル』×2

×
2

○ 防御シールド／近接ダガー『コバルト・ダガーII』

○ 近接大型ブレード『コバルト・バスターソード』

《NDシステム》を搭載した機体。

主なカラーリングは白と青。

コバルトブルー

《コバルト・ガイスト》の直系の後継機。

七本の近接ブレードを主武装としている。

左右に大型スラスタを兼ねたバインダーがあり、それらが可動する事で移動方向の自由度の高い瞬間加速が可能となっている。

機動性能が高く、武装もあまりエネルギーを喰わないため燃費がいい。

コア：CW - 0002

パイロット：ミライ・タスク・シュバルツ

武装：エネルギースナイパーライフル『クロム・ゼファー』

近接戦闘用エネルギーピストル『クロム・ゼファー・ショーティー』
× 2

ビット統合システム『クロム・ランサー』

○ シールドビット × 10

○ ライフルビット × 4

迎撃用マイクロミサイル

《NDシステム》を搭載した機体。

カラーリングは黒と赤。
クロムブラック

銃系の武器を主武装としている。

攻撃武器が全て銃でありながらも、近接戦にも対応している。

機体自体の機動性や防御力は高いという訳ではないが、シールドビットを装備しているので全体的な防御力は高い。

精密射撃時はハイパーセンサーのヘッドギアが可動し、ホログラムスコープを展開させる。

サンライト・ソード

コア：CW-0003

パイロット：レイ・フェアリー

武装：近接ブレード『サンライト・ソウル』

大型クロー『サンライト・ファング』×2

近接エネルギーブレード『サンライト・サーベル』×2

《NDシステム》を搭載した機体。

カラーリングは白と黄。サンライトイエロー

剣を主武装として装備している。

背部に大型スラスタ、機体各部に小型スラスタを装備して
いて、機動性というより機体運動性能に特化しており、格闘での小
回りが利く。

ブレイジング・カイザー

コア：CW-0004

パイロット：皇 炎璃

武装：近接ランス『ブラッティ・カイザー』

エネルギーバズーカ『カイザー・ブレス』×2

エネルギーキャノン『カイザー・ショット』×4

《NDシステム》を搭載した機体。

カラーリングは紫と白。ダークバイオレット

ランスとキャノン系の武器を主武装としている。

機動性はそこまで高くはないが、防御力やパワーが高い。

『カイザー・ブレス』は二つを連結、展開させる事で威力が上昇する。

また、これと両脚部及び背部から両肩の上にせり出す様に装備された『カイザー・ショット』を連携させる事で《ハイパーバースト》の使用が可能。《ハイパーバースト》は、威力は凄まじいがエネルギーの消費も凄まじい。

IS設定？（後書き）

イメージとしては、

コバルト・ソード ダブルオーガンダム

クロム・レヴァン ケルディムガンダム（HW）

サンライト・シャドウ アリオスガンダム（変形なし）

ブレイジング・カイザー セラヴィーガンダム（背中の人なし）

といった感じです。

ちなみに作者は全身装甲があまり好きではないので普通のISみたいな感じです。

第1話 クラスメイトは全員女……と見せかけて!?

——視線を感じる……。

俺、織斑 一夏は今、非常に緊張している。
理由は至って簡単だ。

——クラスメイトが俺以外女なのであるっ!!——

なぜこんな状況になったかつて?

それは二ヶ月ほど前——。

「うー、寒っ……。」

二月の真ん中、その時の俺は中学三年。受験の真っ只中であつた。

昨年に起きたカンニング事件により各学校が入試会場を二日前に通知するという政府のお達しのせいで一番近い高校を受験するはずなのに四駅も乗らなくてはいけなくなっている。

俺が受けようと思っているのは、自宅から近い・学力真ん中・学園祭が毎年ある、の三拍子が揃った私立藍越学園。

この学校の受験を何より後押ししたのが学費の安さだ。超安い。格段に安い。その安さにびっくりして何処かのマジシャンの耳がでっかくなっちゃうくらい安い。

その理由は簡単、この学園の卒業生の進路の九割が学園法人の関連企業に就職するからだ。

卒業後の進路までケアしてくれるなんてありがたい。

——これでは三拍子でなく五拍子じゃないかって？　よくある事だ、気にするな。

俺の家は色々あって両親はいなく、年の離れた姉がいる。その姉には大変世話になっており、正直引け目を感じている。

だがこの藍越学園に受ければ就職も決まったも同然。我が姉に楽をさせてやれるというものだ。

「まあ、先の事はとりあえず受かってから考えよう。」

猛勉強の甲斐があり判定は良かったので、俺はたいした緊張もなく会場に入る。

そして迷った……。

建物の設計に文句を言いつつ、それっぽい部屋があったので入ってみる。

——そしてそこには一体の《IS》が鎮座していた。

なぜここにあるのかと不思議に思いつつ、なんとなく触ってみることに。すると……。

見たことない世界を感じると共にその《IS》が反応した。

——というわけで今に至る。

今日は入学式、新しい世界の幕開け。
しかしこの状況は何だろう？

（これは……想像以上にきつい……。）

視線を感じる……。多分全員からの。

運悪く席もめちゃくちゃ目立つ真ん中＆最前列。
何かしらの救いを求めて窓側の方に目をやる。

「……………」

しかし返ってきたのは返ってきたのは幼なじみである篠ノ之 篁の
顔をそらすという態度。これが六年ぶりに再会した幼なじみに対す
る態度だろうか。……もしかして嫌われているんじゃないだろうか。

「お……………くん。織斑 一夏くんっ！」

「は、はいっ!？」

いきなり大声で名前を呼ばれて思わず声が裏返り、くすくすと笑
い声が聞こえてきた。

——精神的に40のダメージ。

これによりさらにテンパる。

「あ、あの、大声出しちゃってごめんなさい。 お、怒ってるかな

？ あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』で織斑くんなんだよね。　じ、自己紹介してくれるかな？　ダメかな？」

気がつくと副担任の山田真耶先生がペコペコ頭を下げていた。この人本当に先生というかまず年上なのだろうか。

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っっていうかちゃんと自己紹介しますから。」

「ほ、本当ですか？　や、約束ですよ。　絶対ですよ！」

がばつと顔を上げ、熱心に詰め寄ってくる山田先生。……というか『自己紹介をする』という約束を破るヤツなんてあんまりいないと思う。

そして立つて後ろを振り向く。さっきまで感じていた視線を直視する。多くの女子から注目されさらにテンパる。

「えー……えつと、織斑　一夏です。　よろしくお願いします。」

——えつ、何？　この『それで終わりじゃないよね。』的空気は！？

そんなに喋る事ない上に、テンパってて浮かんで来ない。

（マズイ。　このままだと『暗いやツ』のレッテルを貼られてしまう。）

そうして考えに考え抜いた先の答えが……

「以上です！」

ガタタツ。

ずっこける女子が数名いた。

「あ、あの、ダメでしとうわ!？」

バツシ~~~~ン!!!

いきなり頭を思いきり叩かれた。めちゃくちゃ痛い……。でも叩かれ覚えがある。叩かれ覚えて何だよ。恐る恐る振り返るとそこには……

「げえっ、関羽!？」

バツ~~~~ン!!!

また叩かれた。めちゃくちゃ痛い。あまりの音に女子数名が引いてる。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者。」

——てかなんで千冬姉がここにいるんだ？ 職業不詳で月一、二回ほどこしか家に帰って来ない俺の実姉は。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスの挨拶を押し付けて悪かった。」

——あれ？ この流れなんか嫌な予感がする……。

「私が担任の織斑 千冬だ。諸君らを一年で使い物にするのが仕事だ。」

——な〜んだつ〜て〜。

俺が人生の不条理に打ちのめされていると甲高い声がクラスに鳴り響く。耳が痛い。千冬姉は呆れた様子で頭を抱えながらなんか言ってる。なんか今後ろから『もつと叱って！罵って！』とか聞こえたぞ。少しこのクラスが不安になる。

「…で、まともに挨拶も出来んのか、お前は。」

おお、手厳しい。

「いや、千冬姉、俺は——」

バツ~~~~~ン!!!!

叩かれた。めちゃくちゃ痛い。

「織斑先生と呼べ。」

「はい。織斑先生……。」

今のやり取りで俺と千冬姉が姉弟なのがばれてしまった。

「え…？ 織斑くんって、あの千冬様の弟？」

「それじゃあ、世界で唯一男で《IS》を使えるっていうのも、それが関係して……」

「ああつ、いいなあつ。代わってほしいなあつ。」

………最後はとりあえず放っておこう。

二番目の人が言った通り、《IS》は基本女性にしか使えない。男で使えるのは世界中でただ一人、俺だけだ。理由は知らん。知ってたら苦労はしない。

ここは国立IS学園。世界で唯一ISの操縦者育成を目的とした教育機関。

俺が受験しに行った会場はどうやらIS学園の受験会場だったらしい。なんで俺がそこに行ったかというと、

——IS学園と藍越学園って、似てるよな？ まったく、やや

こしいぜ。

キン コーン カーン コーン

「さあ、ショートホームルームSHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だか、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ。」

おお、何という鬼教官。あの西村先生もびつくりだ。てつじん

ちなみに俺の姉、織斑 千冬は第一世代IS操縦者の元日本代表なのだ。しかも公式戦無敗にして第一回IS世界大会 モンド・グロツソの総合優勝者、初代 ブリュンヒルデなのである。ところがある日突然、引退して姿を消してしまった。

———というか、教師してたのかよ……。家族の俺にくらい言えよ……。心配した俺が馬鹿だった。

「席に着け、馬鹿者。」

はいはい、馬鹿ですよ。

ところかわつて、とあるマンションの一室。 そこには一人の男子が眠っていた。

「うゝ……うゝん……。」

——寝い。

なんか何か忘れている気がする……。まだ覚醒していない頭で思い出してみる。

『おい、シヨウ。流石にそろそろ起きろつて。』

金髪の男子が俺を揺さ振る。

『ムリ…、あと5分……………。』

ああ、この寝起きのウトウトする時間は実に最高だ。

『…………たく…………。』

ピンポーン

玄関には二人の女子がいた。

『あ、シヨウ、ミライ。そろそろ行くところ。』

濃い茶髪の背の高いほうの女子が言う。

『悪い、シヨウがまだ寝てる。』

『なに？ まだ寝てるの？』

『…まあ、いつものこと…………。』

奥にいた赤毛の女子が少し呆れて言う。

『はあ。ほら起きろ。』

金髪男子が再び揺さ振る。

『…だいじょうぶ…………、じぶんでなんとかできるから…………。』

『……………本当だな？　じゃあちゃんと起きろよ。　初日から遅刻は洒落にならないからな。』

『…りょかい……。』

よし。これで後少し寝られる……………。

「……………っはっ。」

やばい。寝てたのか。
とりあえず時計を見る。

—— 9時50分42秒

マズイっ！　完璧に遅刻だ！　入学式の日から授業があると聞いていたので、今は多分二時間目くらいだろう。　てか入学式欠席かつ初日から遅刻って結構ヤバイだろう。
そう考えながら急いで身仕度をする。　朝食は抜くしかないか。
そして色々考えて——

——まあ、なんとかなるか。

という結論にたどり着く。 そうしてある程度落ち着いて家を出た。

S i d e : 織斑 一夏

「……………はあ……………」

今は二時間目と三時間目の間の休み時間。

その前の休み時間からそうだったのだが、なんかすごい見られている。 廊下にまでどころか、リボンからして二、三年生もいる。

 だか俺を悩ます原因は他にもある。

 先程の二時間目の授業についていけなかった。あれでまだ基礎な
 んだもんな……………。 それにしても我ながら改めて自分の馬鹿さを
 思い知らされた。

（まさか参考書を古い電話帳と間違えて捨てるとは……。）

「……はあ……。」

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

いきなり声をかけられたので変な返事をしてしまう。
話かけてきた相手は、地毛の金髪が鮮やかな女子だった。

「まあ！ なんですの、そのお返事。わたくしに話し掛けられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

彼女はいかにも今の社会の『女尊男卑』的な人だった。正直、
この手合いは苦手だ。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし。」

——自己紹介してたんじゃないのかって？ 千冬姉が担任だった
事の方がシヨックでほとんど聞いてない。

あれ？ さっきの人が石みたいに固まってる。ヴァ。ディスクと
でも目が合ったのか？

あ、復活した。

「わたくしを知らない！？ セシリア・オルコットを！？ イギリス
代表候補生で、入試主席のこのわたくしを！？」

ん？

「あ、一つ質問いいか？」

「ふつ。下々の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ。」

「代表候補生って、何？」

ガタタツ

話を聞いていた女子が数名ずつこけた。そしてこの人——セシリアだっけ！はまた石みたいに固まってる。月の光をあててやらねば。

「あ、あ、あ、……」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃっていますの？」

すごい剣幕だった。漫画だったら血管マークが三つはついてそうだな。

「おう、知らん。」

セシリアがなんかため息をしている。だって知らないものは知らないんだもん。それとため息つくと幸せ逃げぞ。俺が言えた義理じゃないが。

「信じられせんわ。極東の島国の方はこれほど知識に乏しいもののかしら。常識ですわよ。常識。テレビがないのかしら。」

失礼な、テレビくらいあるぞ。あんまり見ないけど。

「で、代表候補生って？」

「国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されるエリートの事ですわ。単語から想像したらわかるでしょう。」

「そついわれればそつだ。」

「そう！エリートなのですわ！本来ならわたくしの様な選ばれた人間とは、クラスを同じくするだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解してただける？」

おお、復活した。流石代表候補生。

「そうか、そいつはラッキーだ。」

「……馬鹿にしていますの？」

「お前が幸運だって言ったんじゃないか。」

「大体、何も知らないのによくこの学園に入れましたわね。唯一男でISを使えると聞いていましたけど、期待はずれですわね。」

「俺に何かを期待されても困るんだが。」

「まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたの様な人間にも優

しくしてあげますわよ。」

おお、この態度が優しさなのか。初めて知ったぜ。『優しい王様』を指摘してる何処かの魔物にも教えてやりたいところだ。

「わからない事があれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから。」

「あれ？ 俺も倒したぞ教官。……まあ、突っ込んできたのをかわしたら、壁にあたって動かなくなっただけなんだけど。」

セシリアがまた石みたいに固まっている。よく固まるな。今日三回目だぞ。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

「あなた！ あなたも教官を倒したって言うの！？」

「えーと、落ち着けよ。 な？」

「こ、これが落ち着いていられ——」

キーン コーン カーン コーン

話に割って入ったのは三時間目開始のチャイムだった。今の俺には福音に聞こえる。

「っ……！　また後で来ますわ！　逃げないことね！　良くって！
」

良くない。でも言えば怒るだろうから、とりあえず頷いておく。

——　なんか面倒な事になったな。

S i d e : 寝坊した人

「ふう。　いつ見てもデカいな、ここ。」

俺は今I S学園の正面ゲートにいる。

（とりあえず、まず受付行くか。）

ゲートだけでなく、その中もデカかった。　何も知らないと普通に迷うな。　まあ、一回来てるからそれはないだろう。　なん

やかんやで受付にたどり着く。

「ああ、三番目にISに乗れる男性の方ですね。」

なんかそうらしい。公にしたのは俺とミライは同時なんだけどな。公って言うても、知ってるのはIS学園の職員だけなんだけど。あ、国際IS委員会もか。

「あなたのクラスは一年一組です。担任の先生は織斑先生なので早くした方がいいですよ。」

——織斑先生って《ブリュンヒルデ》のか。そんな人をこれ以上待たせるのも悪いしな。

受付の人に礼を言って教室に移動する。移動の途中人に会わなかった。どうやら授業中らしい。さっきのチャイムは三時間目開始のやつだったのか。

てくてく歩いて行くと目的地が見え来た。そっぴや、あいつらって何組なんだろ。目的地に着いて少し立ち止まる。

(……なんて言われるかな。)

そう思いつつ、意を決して教室に入った。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する。」

三時間目は千冬姉が授業をするらしい。 よほど重要な事なのか、山田先生もノートを手に持っていた。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな。」

ふと、思い出した様に千冬姉が言う。 うん？ クラス対抗戦？代表者？

「クラス代表者とはそのままの意味だ。 対抗戦だけでなく生徒会の開く会議への出席……まあ、クラス長だな。 自薦他薦は問わない。 誰か——」

ウィーン

いきなりドアが開いた。 クラスのみんなが驚いている。 勿論俺もだ。 驚いている理由はドアが開いた事だけではない。

その先にいるのが――

――IS学園の制服を着た、俺以外の男子だったからだ。

第1話 クラスメイトは全員女……と見せかけて!?(後書き)

半分くらい原作丸写しです。……うつ、なるべく丸写さないように頑張らねば。

誤字脱字、感想などあればお願いします。

第2話 クラス代表者決定戦開催の決定

Side：織斑 一夏

今俺たち、一年一組の生徒は驚いている。

何せ俺以外にも男子生徒がいたからだ。詳細は知らない。今そいつは教室の入口にいる。というか今ドアを開けたばかりだ。

気が付くとさっきまで教卓辺りにいた千冬姉がその男子生徒の近くにいた。これってもしかして瞬歩ってやつじゃないのか！？まさか千冬姉は死神なのか！？

千冬姉が出席簿を持った手を高く上げていた。その男子生徒はなぜか不思議そうにそれを見ている。やばい、来るぞ！

——月牙……天衝！！！！

バッシ~~~~~ン！！！！

それは天をも衝く響きだった。

「なぜ遅れた？ フルゴール。」

「……………ね、寝坊しまし——」

バッシ~~~~~ン！！！！

それは天をも——以下略——

相当痛かった様でなんかフラフラしてる。

「何をしている、馬鹿者が。まあちよつどいい、自己紹介をしろ。」

「……は、はい。」

まだフラフラしてる。まあ、わかるぜ、その痛み。俺もさっき三回受けたからな。

「…シヨウ・フルゴールだ。これから一年よろしく頼む。」

「ではその空いている席に着け。話を戻すぞ。誰かいないか？」

とりあえず助かったぜ。男一人は辛過ぎる。

S i d e : シヨウ・フルゴール

……痛い。頭がガンガンする。怒られるとは思っていたけどまさか叩かれるとは……。

俺の席は窓側の五列目。あ、眺めいいな。さっきの様子だと何か決めていたらしいが、多分今来たばかりの俺には関係ない事だろう。ああ、頭がガンガンするし、ボーともしてきた。とりあえず思考をシャットダウン。

「はい、織斑くんがいいと思います。」

「私もそれがいいと思います。」

「私はフルゴールくんがいいと思います。」

——なんか呼ばれた様な気がする。

「では……補者は織……一夏とフル……ル……他に……か？」

——ヤバい。ボーとなったら眠たくなってきた……。ダメだ。寝たらまたあれを喰らってしまう。それだけは何としても避けたい。

なので俺は必死に睡魔と戦う。

「お、…れ!？」

「織……。……け、邪魔だ。さて、他に……。……か? いないなら……。……当選だぞ。」

「ちよつ……………た！俺……………らな——」

「納得がいきませんわ！」

なんか声が近くなつた気がする。ちよつと聞き取れる。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ そのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

なんだ、近いと思つてたら隣の人か。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ それに片方は盛大に遅刻しているのですわよ！ わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来てるのであつて、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

なんか隣の音量が高くなつてきた。そのせいでまた頭がガンガンしてきた。

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、それはイギリス代表候補生のこのわたくしですわ！ 大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で——」

「イギリスだつて大してお国自慢ないだろ。 世界一まずい料理で何年覇者だよ。」

——あ、さっきのヤツが反応した。

「あつ、あつ、あなたねえ！ わたくしの祖国を馬鹿にしますの！
？ それからあなた！」

なんかこつちを指差してきた。

「…何だよ。」

「さっきから思っましたけど、わたくしの話を聞いていらっしやるの！？」

さらに音量を上げてきた。　　たたくるせえな。　　聞いているわけがない。こつちは必死に頭の響きに耐えてんだ。

「ギヤーギヤー喚くな。　　少し静かにしろ。　　頭にガンガン響いて耳障りだ。」

「つ——！　　いいですね。お二人とも、決闘ですわ！」

「おう。　　いいぜ。　　四の五の言うよりわかりやすい。」

「めんどい。　　断る。」

「「へ！？」」

なんか二人がきょとんとしてる。

「あ、あら？　　わたくしを前にして怖じけつきましたの？」

「もう、それでいいや。じゃ、そういう事で。」

よし。やっぱり面倒な事は嫌だからな。そういや今これ何を
決めているんだろう？

「臆病者ですね。あなたはどうかしますの？ わざと負けた
らわたくしの小間使い——いえ、奴隷にしますわよ。」

「え？ あ、ああ。真剣勝負で手を拭く様な真似はしない。」

「あら、あなたはこちらの臆病者とは違うんですね。」

「それで、ハンデはどのくらい付ける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「あ、いや、俺がどのくらいハンデを付けたらいいのかなーと…。」

その言葉によりクラスに笑いが溢れた。 もしかしたらコイツ
はアホなのかもしれない。

「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのってISができる前の話だよ。」

「男と女が戦争したら三日持たないって言われてるよ。」

このアホは織斑くんというらしい。『し、しまった…。』みた
いな顔してる。

「寧ろ、わたくしが勝つ事は目に見えていますので、わたくしがハ
ンデを付けて差し上げるべきか迷うくらいですわ。 ふふっ。 男
が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね。」

お隣りさんはさっきまでの激昂が嘘だったみたいに嘲笑を浮かべ
ていた。

「そ、そんなのやって見なきゃわからないだろ。 なあ、フルゴー
ル。」

——…っ、そこで俺に振って来るのか？

「…確かに俺とお前がIS使えるから、男より女が強いとは言えな
くなっただと思うが……。 でもなんかコイツって強いんだろ？
お前が言った事って、自分で『クラスで一番足速いぜ！』とか言っ
てる様なヤツが、陸上部のエース相手に『ハンデ付けましょうか？』
って言ってる様なもんだろ。」

「うっ……。 ならハンデはいらない。」

「ええ、そうでしょうそうですね。」

「織斑くん、今からでも遅くないよ？ ハンデ付けてもらったら？」

織斑くんとやらの近くの人がそいつに話し掛けていた。

「男が一度言い出した事を覆せるか。 なくていい。」

「えゝ？ それは舐めすぎだよ。」

「さて、話はまとまったな。 それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。 織斑とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。 それからフルゴール。 お前にも参加してもらう。」

——最後の所は聞き捨てならないな。

「何故ですか？」

「仮にも他薦されたしな。 それにお前の入学は急だったので、起動試験は行っただが稼動試験は行っていない。 そのためお前のデータがないから今回はその収集も兼ねるとする。」

……拒否け——

「ちなみに拒否権はない。」

——思考を先回りされただど!? この人一体何者だ？

「教師だ。」

……。

「……はあ……。」

結局面倒な事になってしまった……。

ああ、空が青いなあ……。

時は経ち、今は放課後。

昼休みに例のごとくミライら三人に遅れた理由を尋問され、そして呆れられた。

『まあ、そんなのだと思ってたけどね。』

『簡単に予想できたな。』

『…想定内…。』

ちなみに上からレイ、ミライ、炎璃。流石あいつらだ。俺の事よくわかっていらっしやる。

そして今俺は盛大に遅刻した罰として教室の掃除をさせられてい

る。IS学園はより多くの時間をISに注ぎ込むために基本的には掃除は業者がやってくれるが、罰として生徒にやらせる事もあるらしい。

今日は色々と疲れたから早く終わらせて早く寮に帰ろう。ちなみにIS学園は基本全寮制である。

「…はあ。めんど…。」

ウーン

誰かが教室に入ってきた。

「あ、フルゴール。お前何してんだ？」

入ってきたのは織斑だった。

「掃除だ。遅刻してきた罰らしい。」

「そんなのか。暇だし手伝ってやろうか？」

———っ！

「織斑、お前いいヤツだな…。」

あいつらは

『いーやつ』byレイ

『自分で何としろ。』byミライ

『自業自得…。』by炎璃

だからな。

「何だよ急に。あ、後一夏でいいぜ。せつかくの男どうしなんだ。仲良くしようぜ。」

「じゃあ俺もシヨウでいい。」

「それにしてもシヨウ、お前は大丈夫なのか？」

いきなり暗い顔になったな。

「何がだよ。」

「ISの事だよ。さっぱりわからない上に喧嘩買っちゃったもん。」

俺は一応買わなかったがな。

「何とかなるだろ。…きつと……。」

「お前はわかるのか？ 授業。」

はつきり言うと、Yesだ。俺は、いや俺達は色々あってISとの関わりは意外と長い。だが俺達はその事を詳しく言う事は決して出来ない。それは俺達が所属している組織が『裏の世界』にいるからだ。知っているのは国際IS委員会の最高議会だけだ。

「まあ、俺の両親は国際IS委員会に所属しているからな。因み

に俺もそこに所属する事になるらしい。」

これが俺達の『表向き』の設定だ。国際IS委員会に所属と言っ
てしまえば大抵みんな信じるし、融通もきく。因みに委員会（最高
議会）公認の設定だ。

「へえ、そうなのか。よくわからんが凄いな。」

ほら、早速信じた。

掃除を終え、廊下に出ようとしたら童顔緑髪眼鏡の先生がいた。

「あ、フルゴールくん。織斑くんは……あ、いますね。ちょっ
と織斑くんに用がありました。少しいいですか？」

「は、はい。」

俺は関係ない事のようにだ。ならさっさと退散させてもらおう。

「じゃ一夏、先に寮に行ってる。」

「おう。また後でな。」

気のせいだろうか、なんか複数の女子が少し後からついて来てる
気がする。

校舎から寮まではあまり離れていない。……まあ寮だしな。

俺の部屋は確か1026室で、ミライと相部屋らしい。

部屋に着いたんでドアを開ける。そこには死んだはずの兄が……
………！

という事もなく普通にミライがいた。てかまず俺には兄弟はいない。

部屋の感想としてはどこの高級ホテルですか？といった感じだった。

「日本ガンバ……。」

思わず呟いてしまった。ツ。ッターにではない。現実リアルの方で。

IS学園の資金は日本が出している。理由はISを作ったのが日本（正確には篠ノ之 束）だからである。消費税が高くならない事を切に願う。

「思ったより早かったな。」

ミライは今そのベッドになっころがって雑誌を読んでいる。

「まあ織む…一夏が手伝ってくれたからな。」

「世界初の男でIS使えるヤツか。」

そついやミライはまだ会ったことなかったな。

とりあえず自分の物の整理をした後、ベッドにダイブ。すげーふかふか。

——俺もつここで死んでも構わない。

これから毎日ここでゴロゴロ出来ると思つと自然と顔がにやけてしまう。

「……………幸せそうだな……………」

そんな俺を見ていたミライが半分呆れて呟いた。

S i d e : 織斑 一夏

山田先生の話というのは寮の部屋が決まったということだった。元々しばらくの間は自宅通学だったのだが諸事情によってもう寮に入ることになった。荷物（生活必需品のみ）は千冬姉が持って来てくれたらしい。というわけで俺は今寮に向かっている。

「……………ここか……………」

俺の部屋は1025室だ。鍵を開けて部屋に入る。感想は凄いの一言だ。家具などは全て高級品。どこの高級ホテルですか？といった……………ってあれ？ このセリフ先に誰かが言った気がする。

そんなことを思いながらベッドの方へ行き寝てみる。

おお、このモケモ……………もといモフモフ感、間違いなく高いベッド&羽毛布団。こんなモフベッドで寝るのは初めてだ。

——ああ、俺もうここで死んでも構わな……………これも誰かが先に

言った気がする。

「誰かいるのか？」

どこからか声がした。ドアを挟んでいるのか、声は少しこもっていた。確か各部屋にはシャワー室があるらしい。——ん？

「ああ、同室になった者か。これから一年よろしく頼むぞ。」

シャワー室にいたってことはシャワー浴びてたんだよね？ あれ？出て来る感じなの？ってことはもしかしてちよっと今俺やバின்じゃ——

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。私は篠ノ之 ぼ——」

「——ぼ、第……………」

「い、い、一夏……………」

シャワー室から出て来たのは、今日再会を果たした幼なじみだった。その格好はバスタオル一枚を体に巻いただけであり、タオルを押さえている手の下ではかなり大きな胸の膨らみが見て取れた。

「……………」

「……………」

俺も第もきよんとしている。これなら全日本きよとん選手権で優勝狙えるぜ！

「っ……！？　み、見るな！」

「わ、悪い！」

俺は体を捻る様にして後を向けく。多分変な格好になってるんだろうな。

「な、な、な、何故お前がここにいる！？」

「い、いや、俺もこの部屋なんだけど——」

そこからの筈は早かった、いや、凄かったと言った方がいいのかもしれない。

一瞬で俺を通り越してベッドの横にあった鞆から木刀を取り出し、凄い勢いで俺に襲って来る。

——おい、嘘だろ！？　さっきまで後にいたのに！　瞬歩なのか！？　お前も死神だったのか！？　ってそんな事考えてる場合じゃねえ！

俺は急いでドアに飛びつき外へ出る。すぐにドアを閉めてもたれ掛かる。

……ふう、助かつ——

ズドン！

頭がある場所のすぐ横から、ドアを突き破って木刀が飛び出していた。

木刀が木製のドア突き破るってどういうことだよ！

ズズズ……

木刀が引っ込んでいった。ふう、諦めてくれたか。

などと考えた俺は甘かった。スピー。ワゴンのツッコミの人が今の俺を見たら思わず『あ~~~~ま~~~~いっ!』と叫んでしまっくらい甘かった。

ズドン!

数秒前まで俺の頭があった場所にまた鋭い打突が飛んできた。

ズズズ…

ズドン!

今度は数秒前まで胸部（左胸）があった場所から打突が飛んできた。

ズズズ…

ズドン！

次々と繰り出される打突を体を捻る様にして避ける。周りから見れば面白い事になってるんじゃないか？ちょっと違うがもぐら叩きみたいで。一夏突き刺し（Ver・ドア越し）一回百円。ってそれどころじゃねえ！

ズドン！

再び胸部（もちろん左胸）を狙った一撃をドアから離れ、転がる様にして避ける。

「本気で殺す気か！ 今のかわさなかったら死んでるぞ！」

「……なにになに？」

「あつ、織斑くんだ。」

「えー、あそこって織斑くんの部屋なんだ！ いい情報ゲット！」

騒ぎを聞き付けて、それぞれの部屋から女子がぞろぞろと出てくる。しかも、困った事に全員がラフなルームウェアでかなり男の目を気にしない格好をしている。そのせいで一部の女子に至っては、肌色の胸元や、白やピンクなどの逆三角形がちらちら見えている子がいる。

——こ、これは……色々とマズイ……！

S i d e : シ ョ ウ ・ フ ル ゴ ー ル

なんか飲み物が飲みたい。むしょーに。

不意にそんな事を思う。とりあえず冷蔵庫へ行き中身を見る。

パカッ

「何も入ってないぞ。」

俺が扉を開けようとすると同時にミライが言ってきた。もう少し早く言ってほしかった。その言葉通り中にはきゅうり以外何もなかった。まあ初日だし当たり前か………………。。

——ってなんできゅうりがあるんだよ！てかなんできゅうりなんだよ！お前そこまできゅうり好きってわけじゃなかっただろ！！

直接ツッコんだら負けな気がしたので心の中でツッコんどく。仕方ない。買ってくるか。

「飲み物買ってくる。」

「了解。」

鞆から財布を取り出しドアへ向かう。

ドタドタドタドタドタ……

なんか外が騒がしいな。何かやっているのか？まあいいか。そんな事を思いながらドアを開ける。そ

ガン！

「いったゝゝっ！」

なんかおもいつきりぶつけた気がする。開けたドアの向こうをの

ぞくと一人の女子が頭を押さえながら廊下に座っていた。俺のせいで頭ぶつけたのか。

「悪いな。立てるか？」

そう言っただけ俺は手を差し出す。すると何故か顔を赤らめながらその女子は手を取った。そして俺は引張って立たせてやる。少し小さい声で『……ありがとう。』と言っていた。まあ悪いのは俺だしな。ふと気づくと周りには女子がたくさんいてこっちの方を向いていた。その中で一夏が何故か救世主でも見る様な目で俺を見ていた。

「頼む、シヨウ！俺を匿ってく——」

ボタン！

一夏が言い終わる前に部屋に戻ってドアを閉めた。飲み物は後にしよう。外では一夏がドアを軽く叩きながら何か言っていた。俺は携帯を取り出し一夏にメールを打つ。

宛先：織斑 一夏

件名：

本文：お前の事は忘れない。

……………多分。

——送信完了——

外で携帯が鳴った音がした。

『ちくしょ~~~~~~~~!!』

少ししてから一夏の叫びが一年寮に響き渡った。

第2話 クラス代表者決定戦開催の決定（後書き）

せっかく書き始めたのにテストのせいでしばらく投稿できなさそう
……。
ちくしょう！テストめ！

誤字脱字、感想などあればお願いします。

第3話 クラス代表決定戦

S i d e : ショウ・フルゴール

今俺は布団の中でまどろんでいる。なのにさっきから俺を揺さぶってるヤツがいる。 ミライだ。

「さっさと起きろ。二日連続で遅刻はまずい。」

「…あと五ふん……。」

「それこれで七回目だぞ。」

じゃあ35分経ったって事が。まあなんとかなるんじゃない――

『バツシ~~~~~~~~ン!!!!』

「――っは!」

昨日の叩かれた音を思い出しがばつと起きる。少しミライがびっくりしている。あれはもうやられたくない。

とりあえず身支度を済ませる。するとちょうどよくレイと炎璃が来た。

ちなみにミライは二組、炎璃は三組、レイは四組らしい。

「ミライ。とりあえずシヨウは置いてご飯食べに——って
シヨウ！？　なんで起きてるの！？　なんかあったの！？」

「…雪降る…。」

「…色々あったんだよ。色々……。」

レイがわけわかんないみたいな顔している。てか炎璃結構ヒドい。
そうして俺達は部屋を出て食堂に向かった。

「うわ、何種類あるんだよ。」

食堂に着いた俺達はメニューの多さに驚いていた。夕食はまだわかるが朝食もだとは。しかも多国籍。和でも洋でも何でもござれだ。

迷った結果俺は和食の定食、ミライは洋食の定食、女子二人は軽めでサンドイッチとサラダにした。

席を探しながらウロチョロしていると一夏が女子三人と一緒にいた。しかもその隣が空いている。

「一夏、隣いいか？」

「ん？シヨウか。別にい——」

なんか一夏が驚いた様に目を開いていた。視線を追っていくと……ミライがいた。

「シヨウ、そいつ男か？」

「織斑くん知らなかったの？ 二組にも一人男子がいたんだよ。」

一夏の隣にいた子が一夏に教える。　　というか知らなかったのか。噂にはなっていたと思うのだが。

「ミライ・タスク・シュバルツだ。　　よろしく。」

「俺は織斑　一夏。一夏でいいぜ。」

「なら俺もミライでいい。」

「そこのお二人さんは？」

そう聞かれて後ろを見る。ああ、レイと炎璃の事か。

「私はレイ・イフリート。レイでいいよ。」

「…^{コウ}皇 炎璃^{エンリ}です……。私も炎璃で……。」

二人の自己紹介が終わり席に座る。すると今度は一夏側にいた子達が自己紹介をしてきた。見たことあるから多分俺とは同じクラスの子だろう。

「夜竹 さゆかです。」

「私、谷本 癒子。よろしく」

「布仏 本音だよ。 よろしくね、ふーるん、しゅばっち、いふりん、こうたん。」

「……えつと……はい？」

レイが最後の人に色々尋ねたかったんだろうが、なんか混乱している。

「ふーるんはふーるんで、しゅばっちはしゅばっちで、いふりんはいふりんで、こうたんはこうたんだよ。」

まったく説明になってない気がする。

「…多分ふーるんはショウで、しゅばっちはミライで、いふりんはレイで、こうたんは私だと思う…。」

炎璃よくわかったな。てかこんなに早くあだ名を決められるこの子も凄い。のほほんとしてるくせに意外とやるな。

「そついえばお前達仲いいよな。」

一夏が気が付いた様に言う。

「まあ、幼なじみだからな。」

ミライが答えるとレイと炎璃がうんうんと頷く。

「織斑くんだけでなくフルゴールちゃんとミライくんにも幼なじみがいるなんて……。」

「でもまだ三人とも確定してるわけじゃ……。」

なんか向こうの女子が小声で会議を始めている。相変わらず一人はのほほんとしている。

「いつまで食べている！ 私は寮長の織斑 千冬だ。食事は迅速に効率よく取れ！ 遅刻したらグラウンド十周させるぞ！」

十周…… IS学園のグラウンドは一周五キロ……それが十周
……つまり5×10で……50……キロ……。50キロか
……。

——50キロ!!???

フルマラソンより長いじゃないか！ くっ、封印していた早食い

スキルを発動するしかない！

バクバク モグモグ ゴクン

「ごちそうさま。」

「「「「「「「「「「はやつ！！」「」「」「」「」

俺はみんなを置いて先に食器を下げに行く。

「…あ。」

「ん？ あ。」

返却口で昨日ドアに頭ぶつけてた子（俺のせいなんだが）に会った。

「昨日は悪かったな。」

「あ、う、うん。 全然大丈夫だから。」

「そうか。 名前言ってなかったな。 俺はショウ・フルゴールだ。」

「知ってるよ。 同じクラスだもん。」

そうだったのか。 どうりで見覚えがあるようなないようになって感

じしてたのか。

「私、相川 清香。 よろしくね!」

自己紹介も済んだことだし部屋に戻るか。

S i d e : 織斑 一夏

「……はあ……。」

相変わらず理解出来ない……。

今は二時間目と三時間目の間の休み時間。俺は机の上でグロッキーになっていた。

「ねえねえ、織斑くんさあ!」

「はいはい、質問しつもん!」

「今日のお昼ヒマ？ 放課後ヒマ？ 夜ヒマ？」

昨日までの様子見な態度とは変わって、先生達が教室を出るなり女子の半数が俺の席に詰めかけて来た。

シヨウも同じ状態なのかと思い後ろの方を見る。するとシヨウのところにはあまり人がいなかった。今シヨウは眠そうに机の上でぐったりしていて、『ちよつと今たくさんの人に来られるのは辛いんですよ。』的オーラを発していた。

そんなわけで俺の方に来る女子の数の方が多くなっている。ちきしょう！シヨウめ！

「いや、一度に訊かれても——」

困るんだが。と続けようとして、なにやら整理券を配っている女子を見つける。しかも有料。商売をするな、商売を。

「……………」

俺を囲む集団を少し離れた位置で見ているのは、幼なじみの筈だ。相変わらず怒っている様に見える。

それにしても女子の早く質問に答えて視線が非常にづらい。どこから答えたらいいのやら。

「千冬お姉様って自宅ではどんな感じなの！？」

「え？ 案外だらしな——」

バツ~~~~~ン！！！！

おお、いつの間に背後に。我が姉は超能力者か。しかも今の叩きは個人情報をはらそうとしたからだろうか。相変わらず姉からの制裁がづらいぜ。

キンコンカンコン

「休み時間は終わりだ。席に着け。」

「ところで織斑、お前の準備に時間がかかる。予備の機体がない。だから学園で専用機を用意するそうだ。」

——はい？

S i d e : ショウ・フルゴール

「せ、専用機！？ 一年の、しかもこの時期に！？」

「つまりそれって政府からの支援が出るってこと？」

「ああ。いいな……。私も早く専用機欲しいなあ。」

一夏に専用機が与えられるらしい。数少ないISを操縦できる男だからデータが欲しいんだろうな。まあでもよかったな、一夏あれ？ なんかあいつ混乱してる。話についていけないのか。見るに堪えかねたという感じで織斑先生が一夏に教科書を読ませる。

内容は簡単に略すと、

1、ISは世界467機しか存在しない。

2、コアは篠ノ之博士しか作れない。博士はコアをもう作っていない。

という感じだ。

「本来なら、IS専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解出来たか？」

「な、なんとなく……。」

チラッ チラッ

なんか一夏が少し悪そうにこっちをチラチラ見てくる。何がしたいんだ？あいつは。

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……………」

一人の女子が先生に質問した。

——篠ノ之 束。ISをたった一人で開発させた希代の天才。ちなみに今は行方不明だ。

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ。」

クラスみんなが驚く。無論俺も。一夏だけが知っていたのか、心配そうに織斑先生と篠ノ之を見ている。

「ええええーっ！ す、すごい！ このクラス有名人の身内が二人もいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？ やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？ 今度ISの操縦教えてよっ。」

「あの人は関係ない！」

突然、篠ノ之が大声を発した。教室が静まり反る。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられないようなことは何もない。」

そう言つと篠ノ之は窓の外に顔を向けてしまった。
あいつも色々あるんだな。

「さて、授業を始めろ。」

俺は考えるのをやめて教科書を開いた。

「シヨウ。」

三時間目が終わり、一夏が話し掛けてきた。

「どうした？」

「なんかさ、……悪いなって思っで。その、俺の方が先に専用機貰っぢやっで。」

だからさっきチラチラこっぢ見てたのか。そんなこと関係ないのに。

「なんだそんなことか。」

「でもIS数に限りがあるんだよな。俺なんかが貰っでいいのか？」

「ご厚意は受け取っでいた方がいいぞ。」

「…でもな。」

一夏は納得出来ならしい。まあ俺には必要ない。

時は移って昼休み。幼なじみ達と一緒に昼を食べているのかだが、目の前でテンションが下がってグダってるヤツが二名ほどいる。

「……クラス代表になってしまった…。」

「……右に同じ……。」

二組と三組には専用機持ちがこいつら以外はいなかったのでミライと炎璃がクラス代表になってしまったらしい。

「うちのクラスに代表候補生がいてよかった。」

この二人と違ってレイはニコニコしている。

「シヨウはどうだったんだ？」

「俺は来週戦って決めることになった。断りたかったが俺は強制参加らしい。」

断っていいなら喜んで断る。

「特訓するなら付き合っよ？」

レイは相変わらずニコニコしたままだ。

「別にいらない。勝つ気ないからな。」

そう、勝たなければ何の問題もない。イギリスの代表候補生さん

は『わざと負けたら奴隷にしますわよ!』とか言っていたが、なら全力でやればいいだけだ。

——『何の特訓も準備もしてない』俺の全力で。そして、負ければいいだけだ。

ぼんやり周りを見てみると一夏と篠ノ之がいた。一夏は何か篠ノ之に頼んでいるようだ。あいつはちゃんと特訓とかするんだろうか。

S i d e : 篠ノ之 篇

今日はクラス代表決定戦当日。私と一夏、それとフルゴールはアリーナのピットにいる。

じ〜〜っ

一夏がさつきからじゅっところちを見ている。

「なあ、篤。ISのことを教えてくれるって話だったよな。」

ぷいっ

思わず顔を背けてしまった。

「目を逸らすな。一週間、剣道の稽古しかなかったじゃないか。」

そう、この一週間は剣道の稽古しかしてなかった。

一週間前、私は一夏からISのことを教えてくれと頼まれた。ISの操縦とは言え動かすのは人間だ。なのでまず手始めに今の一夏の腕を見てやろうと思いと剣道で相手をした。

手始めのつもりだった…………。

結果は私の圧勝だった。昔の一夏は強かった。なのに何だ！このザマは！聞けば中学の時は剣道はやってなかったらしいじゃないか！これではIS以前の問題だ！

そう思った私は一夏を鍛え直すことにした。だがその裏で一夏と一緒にいられるという思いがあった。昔の様に一夏と一緒に稽古。そのことが凄く嬉しくて、懐かしくて…………気が付いたら一週間経ってしまっていた…………。

「し、仕方ないだろう。お前のISも無かったのだから。」

我ながら見苦しい言い訳だ。

「まあそうだけど——じゃない！ ISが無くつたって知識とか基本的なこととかあっただろう！」

ぷいっ

また思わず顔を背けてしまう。

「だから目を逸らすなったら！」

一夏が問い掛けてくるのを受け流していると織斑先生と山田先生が何やら話合っていた。

「どうします？ 織斑先生。」

「公平性を保ちたいので出来れば順番どうりで進めたい。」

「でもまだ織斑くんの専用機は……。」

試合の順番は一夏対フルゴール、一夏対オルコット、オルコット対フルゴールの順で行わせることになった。ちなみに公平なくじ引き。順番によってはアドバンテージを持つことがある。運が良かった者がそれを手にすることができる。

だがここで問題が発生した。山田先生の言う通り、一夏のISは

いまだに届いていない。

「仕方ない。織斑には訓練機を使用してもらおう。」

そう言って先生達の会議は終わりこちらの方に来た。

Side：ショウ・フルゴール

「アリーナを使用出来る時間には限りがあるので試合を始める。

織斑は専用機がまだ来ていないので訓練機を使用するように。まずは予定通り織斑とフルゴールの試合から始める。」

ついにクラス代表決定戦が始まる。結局俺は対策などは何もしなかった。

「では織斑くん、打鉄かラファール・リヴァイヴの好きな方を選んで下さい。」

一夏は打鉄を選んでいた。機体性能的には打鉄は防御特化型で接近戦寄り、ラファール・リヴァイヴは万能型だ。

装着し終えた一夏はカタパルトへ向かって行った。

「じゃあ先に行ってるからな。」

「わかった。」

そう言うで一夏はピットから飛び出した。俺も行くか。

「ではフルゴールくんも打鉄とラファール・リヴァイヴ、好きな方を――」

俺は山田先生の話のスルー（わざとではない。決して。気付かなかっただけ。嘘だと思っヤツがいるならそれは気のせいだ。）し、右腕の袖を捲る。山田先生が『え！？　む、無視ですか！？』とか言ってた気がするが、そこは気にしない。捲った右腕には白と灰色の色をした腕輪があった。それに意識を集中させ右腕を上げる。次の瞬間、俺は光に包まれた。そして光が消えた頃には俺はISを装着していた。

「せ、専用機！？　フルゴールくん専用機持ってたんですか！？」

「フルゴール、この前も言っ通り今回の試合はデータ収集も兼ねている。真面目にやれ。」

「って織斑先生知ってたんですか！？」

さっきから山田先生があたふたして見てて面白い。

「わかってますよ。では行きます。」

あたふたしている山田先生には触れないでおいで織斑先生に返事を
する。そして俺もカタパルトへ行きピットから出て指定された位
置につく。

『シヨウ、お前専用機持ってたのか!?!』

織斑が驚いてこちらを見ている。まあ言っなかったしな。

カウントが始まる。

— 5 —

「一夏、始まるぞ。集中しろよ。」

— 4 —

「言われなくてもわかってるさ。」

— 3 —

一夏が近接ブレードを展開する。

— 2 —

俺も近接ブレードを展開右手に展開する。

— 1 —

アリーナに緊張が走る。

— 試合開始 —

S i d e : 織斑 一夏

目の前には白と灰色の機体を身に纏ったショウがいる。

— 5 —

少し恥ずかしいが、俺は緊張して震えていた。これが学園生活最初の一戦。緊張しない訳がない。

「一夏、始まるぞ。集中しろよ。」

— 4 —

「言われなくてもわかってるさ。」

そう言いつつ俺は近接ブレード展開の指示をする。

— 3 —

右手に近接ブレードが展開され、それを両手で持つて構える。
すると相手の情報が表示された。

「——相手IS コバルト・ブレイド 戦闘モードへ移行、近接ブレード展開——」

— 2 —

シヨウの右手に近接ブレードが展開される。

1

ついに始まるっ！

——試合開始——

先手必勝！ 俺は迷わずシヨウに突っ込んで行く。シヨウも避けようとせずに身構えている。

ガキン！

ブレード同士がぶつかり合う。俺は次々と刀を撃ち込んでいく。まさかここで剣道の特訓が役に立つとは。箒に感謝しなきゃな。一旦距離を取ろうとシヨウが離れる。

「逃がさねえ！」

シヨウを追いかけ刀を振る。決まると思った一撃だったが、シヨウはそれを避けて俺の後ろにつき、ブレードを一閃する。俺はかわそうとしたがかわしきれずにシールドエネルギーをいくらか持つて行かれた。

「今のでいけると思ってたんだがな。」

そう言いながら今度はシヨウから攻めてくる。一撃一撃が鋭い。
だか――

「そう何度もやられねえ！」

こちらも負けずに迎え撃つ。

ガキン！ ガキン！ ガキン！

ぶつかり合っては離れ、またぶつかり合っては離れるを繰り返す。

――ここで勝負を仕掛ける！

俺は刀を大きく振り上げる。モーションが大きくなったスキをつこうとシヨウがブレードを横に振る。

――来た！

俺はその一閃を体を反るようにしてかわし、振りかざした刀を体を捻りながら横に一撃を放つ。だかシヨウはそれに反応し、ブレードで身を守る。でも受け止めきれずに大きく飛ばされた。

「やれなかったか……。」

だが一つわかったことがある。あちらのブレードよりこちらのブレードの方が大きい。なので力勝負になれば押し勝てるということだ。

——もしかしたら……このままいけるかもしれない……！
勝つための希望が見えた。

S i d e : ショウ・フルゴール

はつきり言ってピンチだ。少し前から力で押され始めている。このままいけば負けてしまう——

——あれ？ 俺は何を思ってるんだ？ 関係ないじゃないか。別にこのまま負ければ——

気が付けば目の前に刀を大きく振りかざしている一夏がいた。

第3話 クラス代表決定戦（後書き）

どうもTOMATOMANです。少し遅いかもしれませんが読んでくださる方、感想など書いてくださった方ありがとうございます。

さて、話は変わりますが、この話の主人公は誰か？という質問がありました。

作者としては、今のところ一夏の出番が多い気がしますが主人公はクロスウィングのみなさん（特にシヨウ）でいきたいと思っています。そう思ってもらえるよう頑張るので応援していただけるとありがたいです。

ついですが、シヨウとミライには原作でモブっぽくなかったモブキャラの方々にフラグを立てていこうと思っています。

今回はシヨウの見せ場が出ます（予定）。お楽しみに。

最後に、誤字脱字、感想などあればお願いします。

第4話 男の力

S i d e : ショウ・フルゴール

現在クラス代表決定戦一試合目、俺対一夏。

今、無防備な俺の目の前には刀を大きく振りかざした一夏がいる。

先ほどから力で押され始め、じわじわとシールドエネルギーを削られてきた。多分この重いだろう一撃を喰らうとエネルギーは0になる。だからと言って今からじゃ避けきれそうにない。それに――

――負けていい……。負けていいんだよな……。

最初からそのつもりだった。全ては計画通りだ。なのに……

——何なんだよ……。この感じは……。

何とも言えない感情が体を巡る。

だがそんな俺のためだけに時間を止めてくれるほどこの世界は優しくはない。

俺はそのまま一夏の一撃を喰らう。

この感じが何なのかわからないまま、俺は一夏に負けた。

S i d e : 織斑 一夏

試合が終わって俺達はピットに戻った。待ってくれていた箒は少し嬉しそうだった。

「この一週間の剣道の稽古が役に立ったよ。ありがとうな、箒。」

「ふ、ふん！ と、当然だ！ 何せ、わ、私が稽古をつけてやったのだからな！」

箒は腕を組んでそう言いながら少しそっぽを向く。 あ、こいつ照れてるな。 まったく、素直じゃないなあ。 そう思いながら俺はシヨウに話掛ける。

「シヨウ、今回は俺の勝ちだったな。」

「ああ、そうだな。 だがまあ、これで俺がクラス代表になるのは一歩遠退いたというわけだ。 俺的には助かった。 じゃあ一夏、次の試合も頑張れよ。」

そう嬉しそうに言いながらシヨウは控え室へ去って行った。

だが気のせいだろうか。 嬉しそうにしていたシヨウの横顔が一瞬だけ複雑な表情になっていたのは。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

山田先生が本気で転びそうな足取りでいつもより慌てて走って来た。 見ているこっちがハラハラする。 というかまず三回も呼ばなく

ても大丈夫ですよ。

「来ました！ 織斑の専用IS！」

「織斑、すぐに準備をしる。先程も言ったがアリーナを使用出来る時間は限りられている。ぶつつけ本番でものにしろ。」

目の前の搬入口が開いていく。

——そこには、飾り気のない眩しいほどの『白』がいた。

「これが織斑くんの専用IS、 白式 です！」

それは俺を、こうなることをずっと待っていたかのように思えた。

「すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。」

せかされて俺は 白式 に触れる。試験の時に、初めてISに触れた時に感じた感覚はない。ただ、馴染む。理解出来る。これが何なのか、何のためにあるか、——わかる。

千冬姉の言葉通りに白式に乗り、白式と『繋がる』。

「——相手IS ブルー・ティアーズ を感知。操縦者セシリア・オルコット。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り。——」

相手の情報が流れてくる。それだけでなく、多くの情報が流れてくる。そのどれもが普段から見ているかのように理解出来る。

「一夏、気分は悪くないか？」

センサーによってその声が震えているのがわかり、心配してくれてるんだなと思う。

「大丈夫だ、千冬姉。」

「そうか。」

その声には安堵が含まれていた。次に俺は何か言いたそうにしていた筈に意識を向ける。

「筈。」

「な、なんだ？」

「行ってくる。」

「あ、ああ。勝って来い。」

筈からの激励を受け、俺はカタパルトに向かう。

現在も最適化処理のため数値や表面装甲が見たことない桁で目まぐるしく変化していた。

ともあれ、今は裏方に意識を向けている場合ではない。『敵』がそこにいるのだから。

そうして俺はピットから出た。

S i d e : レイ・イフリート

「シヨウ負けちまったな。」

今は一試合目と二試合目の間のインターバル。私とミライと炎璃はシヨウの試合を見に来ていた。

アリーナの競技グラウンドには誰もいない。さっきまでシヨウが戦っていて、そして負けた。はつきり言ってさっきの試合のシヨウは全然ダメだった。

シヨウは本来、生身の状態なら凄く強い。

シヨウの家系は代々『大輪流』という剣術の流派を継いでいる。非常に小さい流派であり、普段から大会などには出場していないため知名度はほとんどないと言ってもいい。それに『大輪流』は修得が難しいだけでなく、『攻撃は最大の防御』がモットーであるため防御の型がない。よって中途半端に修得した状態では何も役に立たない。それも流派が小さい理由の一つでもある。だが完全に修得し

た者が使えば、ずば抜けた強さを発揮する。その者の一人のシヨウ（ちなみに私も）は昔、私と一緒に一度だけ出たことのある大会で初出場なのにそのまま全国優勝してしまうほどだ（私も優勝したが優勝候補の子とはとある事情で棄権したらしい）。

ISを操縦するとなると話は別になるが、それでもあくまで操縦するのは人間。つまりその動きをトレースすることになる。生身の強さにある程度比例してIS装着後も強くなる。さらに言えばシヨウがISを動かしたのは今回が初めてではない。今まで隠していたが初めて動かしたのは二、三年前の話だ。だから実力がこの程度なはずがない。

「まったくアイツは本気の時とそうでない時との差が激しすぎる。」

「…極端…、でもそれがシヨウ…。」

シヨウは勝つ気はないと言っていた。だけどシヨウはさっきの試合をして本当にそうだと言えるのだろうか……。多分言えない。
シヨウの根の性格ホントを考えるときつとそう。

けどシヨウは自分の気持ちに気付いていないんだと思う。まったく、自分自身の気持ちにすら気付けないってどれだけ鈍感なの！そのくせ周りの読まなくてもいい空気は読んだりするから尚更質が悪い。

「はあ、仕方ないわね。ちょっと行ってきますか！」

「何処にだよ？」

「シヨウのところに、自分自身の気持ちを気付かせに、よ。」

S i d e : シ ョ ウ ・ フ ル ゴ ー ル

一夏の試合が終わった後、俺は控室にいた。今は俺以外誰もいない。

「……………」

俺は疲れて何も考えずにただ、ぼーっとしていた。気付けば二試合目が始まっていた。控室のモニターに映っている一夏は見たことがない白いI Sを装着していた。あれが一夏の専用機なのだろう。一夏は必死に相手や相手のビット兵器からの攻撃を凌いでいるが、それも時間の問題だろう。

「はあ…、めんど……。」

また何も考えずぼーっとする。

バサッ

いきなりタオルらしきものを被せられ視界が塞がる。それを取って後ろを向くとそこにはレイがいた。

「何、ぼーっとなんかしてるの？」

「そんなこと言われても……。」

「どうせなんかモヤモヤとかしてるんでしょ？」

確かにそうだ。あの時感じたものが何なのか未だにわかっていない。

「シヨウはどうしたいの？」

——は？ いきなりこいつは何を言ってるのだろうか。唐突過ぎて訳がわからない。

「さっきの試合見てたけど、全然わからなかったよ？ あの試合でシヨウがどうしたかったのか。」

こっちとしては今レイが何を言いたくて、どうしたいのかがわからない。

「全然シヨウらしくないよ？ あ、でもシヨウらしいっちゃシヨウらしかったけど。」

「なんだそれ。てか俺らしいってなんだよ。」

「アーーーー!!」

歓声が聞こえたのでモニターを見る。そこにはさっきとは違った形をしたISを装着している一夏が映っていた。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ。でもそろそろ、守られるだけの関係は終わりにしないと。これからは俺も、俺の家族を守る。」

それは一夏の意志だった。まだ弱い、だけど輝きならそこら辺のものには負けない、弱いけど強い意志。

「……は？　あなた、何を言って——」

「取り敢えずは、千冬姉の名前を守るさ！　弟が出来じゃ格好が付かないからな。」

「だからさっきから何を……ああもう、面倒ですわ！」

一夏がオルコットに迫る。それを防ごうとオルコットはミサイルビットを放つ。だが一夏はそれすらも切り裂いて駆け抜ける。手にした刀が光輝く。それがオルコットに届こうとしたとき——

「——試合終了。勝者、セシリア・オルコット——」

「あれ？ 何で一夏負けてるの？」

レイが不思議がっている。俺だって不思議だ。

「まあいいや。いいお手本だったしね。それより次の試合はちゃんとしてよね？ でないとモヤモヤ増えちゃうよ？ じゃ、観客席で見てるから！」

そう言っただけでレイは去って行った。こっちとしてはモヤモヤがすでに増えている。

考えてもしょうがないので俺なビットに向かった。

S i d e : セシリア・オルコット

今わたくしは二番ビットにてエネルギーの補給と破損したビットの修復をしている。

さっきの試合、どうしていきなり相手のシールドが0になったのかは未だにわからない。けど、あの一撃が当たっていたら、どうなっていたかはわからない。

いつだって勝利への確信と向上への欲求を抱き続けていた自分にとって、この困惑はひどく落ち着かないものだった。

（わたくしが勝ったのに……。）

けれど、腑に落ちない。すっきりしない。

（――織斑、一夏――）

先程の相手を思い出す。あの、強い意志の宿った瞳を。

それに逆連想して今は亡き父を思い出す。

父は母の顔色ばかりをうかがう人だった。はっきり言って情けないと思った。男とは皆こうなのだろうかと思った。

だがあの瞳は違った。

――何だろう、この気持ちは。

（いけませんわ！　こんな調子では！）

自分に叱咤し、気持ちを切り替える。

まだ試合は残っている。もう先程のように油断はしない。

それに毅然と振る舞わなくては。それが今のわたくしなのだから。

S i d e : ショウ・フルゴール

「フルゴール、オルコットの補給が終わり次第試合を開始する。準備をしろ。」

今ピットには俺、一夏、篠ノ之、織斑先生、山田先生がいる。オルコットは向こうのピットで補給をしているらしい。

先程何故一夏のエネルギーが0になったのか聞いてみたが当の本人もわからないらしい。それでいいのか？専用機持ち。

「ショウ、セシリアは強かったぞ。気をつけるよ。」

それはさっきの試合を見てわかっている。射撃は正確だし、ピットの動きも複雑だ。勝つのは難しいだろう。けど負けてしまえばあいつがクラス代表となり丸く納まる。

「フルゴールくん、セシリアさんの機体の準備が出来たので試合開始です。指定の位置に移動して下さい。」

山田先生に指示され、カタパルトに向かう。ピットを出るとそこには先程一夏と試合をしていた蒼い機体があった。

— 5 —

「あら、臆病者のくせによく来ましたわね。褒めて差し上げますわ。」

— 4 —

「さっさと始めて終わらせようか。そして俺は帰って寝る。」

— 3 —

「ならすぐにでも終わらせて差し上げますわ!」

— 2 —

「——近接ブレード展開——」

「――相手IS射撃体勢に移行――」

――試合開始――

キュインッ！

開始と同時に相手からの砲撃を受ける。鋭い一撃だったので、直撃はしなかったものの、エネルギーはいくらか削られた。

「あら、直撃はしなかったようですね。まあ、いいですね。あなたも踊って頂きましょうか。このセシリア・オルコットとブル・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

キュインッ！ キュインッ！ キュインッ！

次々とビームが飛んでくる。一つ避けると待っていたかのようにその回避先にビームが飛んでくる。それを避けようとすると、また回避先にビームがくる。その繰り返し。

「避けているだけでは勝てませんわよ？ 近付いてその手に持っていらっしやる剣でも振るって見なさいな。」

相手がなんか言っているがこちらはビームを避けるのに精一杯で答える暇がない。

「テンポを上げますわよ！」

そう言つと相手は4基のビットを放つ。それぞれが独立して動き、俺を多角的に狙ってくる。

だがさっきの試合から見ても、あいつはビットを操作しているときは無防備になる。それを狙って近付こうとするが、ビットの砲撃に阻まれる。それによって俺の動きが止まる。相手の口元がわずかに上がり笑つたのが見えた。

——まずい！

キューインッ！

「ぐわあああッ！」

まともな一撃をくらい、シールドを突き抜けた衝撃により体が痛む。

体勢を調えたと思えばすぐにビームの雨に晒される。俺はただ避けることしかできなかった。

「随分としぶといですわね。」

あれからしばらく砲撃を受ける続け、シールドエネルギーは虫の息程度にしか残っていない。装甲にもボロが来ていた。

「でも、もうすぐ終わりですわ。」

——負けるのか、俺は。これで面倒なことにならなくて済むのか。
クラス代表を賭けた戦い。俺はそんなの興味がないくところか、むしろ嫌だった。

相手のライフルの銃口が光っていくのが見える。

キューインッ！

相手のビームが当たるその時だった。

——『シヨウはどうしたいの?』

ビュン——

俺は反射的にそのビームをブレードで切り裂いていた。

「——なっ!」

相手が、観客が、そして何より自分自身が驚いていた。

俺は思わずブレードとそれを握っていた右手を見つめる。

あれを受けていればもう終わっているはずだった。なのに俺はそれを反射的に拒んだ。

———どういうことだよ。

不意に試合前のレイの言葉を思い出す。

——『シヨウはどうしたいの?』

その言葉が俺に本当の俺の気持ちを気付かせた。

——まさか俺は、……勝ちたかったのか?

そう思った瞬間、歯車が噛み合ったかのように心がすっきりし、モヤモヤが消えた。

そうか。それならあの一夏に負けた時の感情も理解出来る。
俺はクラス代表になることから遠ざかり嬉しいと思い込んでいた。
だが本当は悔しかったんだ。だからモヤモヤしていたんだ。

こんなに簡単なこともわからなかったなんて何だか笑えてくる。

「何を笑っていますの?」

「いや、俺は馬鹿だなと思ってな。まさか自分が勝ちたかったなんて思ってもみなかったからな。」

「そうですか。でも残念ながら、もう手遅れですわね。」

「そいつはどうか？ 世の中には『諦めたらそこで試合終了ですよ。』って言葉もあるんだ。」

「そうだ。試合はまだ終わってはいないんだ。」

「それに本気を出せばまだどうにかなる。」

そう言っただけは投影パネルに手を伸ばす。そして今まで触れなかったボタンを押す。

「――操縦者照合確認。これより最適化処理を開始します。――」
フィッティング

「ふんっ！ なら精々楽しませてくださいな。」

画面に表示される数値が目まぐるしく変動してゆく。

勝負はこれからだ。まだ終わっちゃいない。まだ終わりがくならないなら、勝ちたいなら諦めてはダメだ。そして、相手に俺の全力をぶつけるんだ！

——あー！

「——やっちやるぜー！ー！」

第4話 男の力（後書き）

どうも。TOMATOMANです。

戦闘シーンって書くの難しいですね。全然だめです。

誤字脱字、感想などあればお願いします。

第5話 剣士の目覚め

Side：レイ・イフリート

「なんか格好いいこと言ってたけどやってることさっきまでと一緒にじゃん。」

「なんか期待して損した感じ。」

「さっきのはまぐれだったの？」

先程のショウの宣戦布告的なから10分が経った。

相変わらず相手の攻撃を避けているだけのショウに観客は『期待はずれ』だの『結局やっていることがさっきと同じだ』だの『ただの格好つけ』だのと言っているが、私としては今のショウで満足だった。

「あいつに何を言ってきたんだ？」

「ただ話したただだよ。」

「……………流石将来の嫁候補……………」

炎璃がボソッと何か言った。

「ん？ 何？」

「…………なんでもない……。」

「…………？」

私達はシヨウがさっきまでとは違うことはわかっている。

シヨウの変化はよく見ていればこの場にいる誰でもわかるはずだ。

だってさっきまでとは目の輝きが違うのだから。

もつと動け、俺の体！ もつと速く！ もつと！！

キュインッ！ キュインッ！ キュインッ！

見極めろ！相手の射撃を！ 予測しろ！相手の動きを！
まだまだこんなもんじゃないはずだ！

「悪あがきを……！ いい加減墜ちなさい！」

ビットは俺の一番反応が遅い角度を狙ってくる。そして射撃はその回避先を狙ってくる。それがわかれば相手の砲撃を予測できる。

「くっ、ならこれならどうですか！」

相手は腰部アーマーを迫り出した。そこからミサイルビットが飛んでくる。

俺は逃げずにただそれを待つ。そして距離が詰まってきたとき、俺はその場から消えた。というより一瞬消えて見えるような速さで駆け抜けた。次の瞬間にはミサイルビットは爆散した。

大輪流剣術、攻撃の型――炎影――

元々は相手の攻撃が当たる瞬間その動きに合わせて身を屈め、それによって出来た当たるまでのわずかな時間で一気に相手まで迫り、駆け抜けるように一閃するという技。相手から見れば一瞬消えように見え、その隙を突く。

一か八かでミサイル相手に使ってみたが、身を屈めると同時に一閃することで成功した。成功して何よりだ。

「き、消えた!？」

俺は少し笑ってみせた。

「なっ…、いい度胸ですわ!」

相手がビットを飛ばしてくる。俺はアリーナの壁に沿うようにして飛ぶ。後ろからビットが砲撃しながら追ってくる。追いつかれないうちにしながらその砲撃をハイパーセンサーで後ろを確認しながら避ける。

「——最適化処理最終段階に移行。NDシステムとの同調率78%。
機体の制限を解除。これより限界機動を開始してください。——」

機体の画面からデータが表示される。どうやらコイツは俺の限界を知りたいらしい。

「なら見せてやるよ!」

これから共に戦う相棒に——

「俺の限界を!!!」

俺は今出せる最大の速度で駆け抜ける。ビットも後を追うようについて来る。

だが俺はここで急停止と後方への瞬間加速を同時に行う。

左右の非固定浮遊部位のバインダーが前方へ迫り出し、上部にあるアンロック・ユニットのコーン型の大型スラスタからエネルギーが噴射される。

機体の速度が一気に無くなる。

次の瞬間、瞬間加速によって後方へ一気に加速する。

一連の動きによる凄まじいGで体が捻れ、引きちぎられるような感覚が襲う。激痛に顔を歪める。だが構わない。

ビットが俺の急な動きに反応出来ずに俺を追い越して行く。

再び俺は急停止と前方への瞬間加速を行う。

バインダーが後方へ向き、エネルギーが噴射される。急停止直後の超加速。再び激痛が体を襲う。だがこれでビットの後ろを取った。

「うおおおおー!!」

まず一基、そして二基とビットを破壊する。だが相手は代表候補生。馬鹿ではない。このままだど全て墜とされると判断し、ビットを機体に戻す。

しかしそれが逆にショウにチャンスを作った。ビットが機体に戻

るときはに隙ができる。相手はビットを操作しているときは自分は攻撃出来ない。そこにわずかな空白の時間ができる。

——数少ないオルコットの弱点。

俺は一気に突っ込み、残りのビットを潰そうとする。ブレードがビットに届く。

だがブレードがビットを両断するかに思えたその瞬間、オルコットが笑った気がした。

キューインッ！

残っていた二基のビットのうち、俺が狙っていなかった方のビットが、俺が狙っていたビットを打ち抜いた。

その一射は、俺がロックされていたわけではなかったので気付くことができなかった。

ビットが爆発していくのがゆっくりと見える。俺の視界は一面煙で覆われた。

ショウの視界が塞がれているのを良いことに、セシリアはその煙の空間にライフルを乱射していた。

誰もが試合が終了したかと思ったその時、一本の剣が煙を引き裂

いた。そこには剣士の真の姿があった。

「——最適化処^{フィッティング}理及びNDシステムとの同調が完了しました。確認
ボタンを押してください。——」

ためらうことなくそのボタンを押す。すると機体に変化が起こる。

——ヤベエ……。コレは……。

手に持っているブレードの刃部が青く色付く。機体の方も今まで
灰色だった部分は鮮やかな青^{コバルトブルー}へ変わっていく。
そして何よりさつきとは比べものにならない機体との一体感——

——めちゃくちゃヤベエ……!!

「あ、あなたも初期設定のままで戦ってましたの!？」

相手が驚いている。だが今の俺にはそんなのどうでもいい。今の
俺にはやることは一つしかない……!!

——いくぜ。相棒……!!

——近接ブレード　コバルト・ソード　展開——

左手にもブレードが展開されるのを確認し、一気に飛び立つ。

キュインッ！キュインッ！キュインッ！

オルコットが残りのビット飛ばし攻撃してくる。だけどまるで当たる気がしない。

「ははっ。スゲエ……。」

思わず笑いが溢^{こぼ}れる。そして最後の一基を右手のブレードで切り裂き、オルコットに近付き左手のブレードで攻撃する。

オルコットも接近戦用武装を展開するが、ここまで来れば俺の距離だ。そのまま左手のブレードでそれを弾き、右手で一撃を与える。オルコットは飛ばされ、そのまま距離を取る。

「これで決める。」

——NDシステム最大稼働——

背部から二本のエネルギーケーブルが飛び出し、左右のコバルト・ソードにそれぞれ接続される。莫大なエネルギーが流れてい

き、ケーブルが、コバルト・ソードの刃部が光り輝く。

「させませんわ!」

オルコットがライフルで狙い撃ってくる。それを全て避け、瞬間加速で一気に迫る。オルコットはライフルで身を守ろうとするがそれすらも切り裂く。

そして高らかに右手を振り上げる。俺の姿が太陽と重なる。ブレードがさらに輝く。

大輪流剣術、原点の型——力撃——

これ即ち、^{すなわ}力で相手を叩き斬れ!!!!

「Get , Ride!!!!」

渾身の力で俺はオルコットを切り裂いた。

『——試合終了。勝者、ショウ・フルゴール——』

そして勝利を手に入れた。

S i d e : ミライ・タスク・・シュバルツ

昔からあいつはそうだった。

それはシヨウやレイと出会ったばかりのまだ小さかった頃。
俺とシヨウは些細なことで上級生達にボコられていた。多分二、
三歳は年上だったと思う。あっちは四人、こっちは二人。
シヨウも剣術を習いたてで、力量はあっちが圧倒的だった。

俺は無抵抗でされるがままになっていた。

だがシヨウは違った。

最後まで屈しようとはしなかった。

いつもは面倒臭がつているが、やるときはやり、そして普段は隠れているが、あの頃から変わらない一度燃えれば早々冷めることがない熱い心。

そんなあいつと出会って良かったと思う。

俺の、いや俺達の一番の親友であり、そして一番のライバルでもある。

そんなあいつが見せたこの戦い。俺達の心を動かすには十分だった。

「私達も負けてられないわね。」

そう言ってレイが席を立つ。

全くその通りだと思う。そんなあいつだから勝ちたいと思える。

あの時もそんな、屈しないあいつの姿を見たから――

——生まれて初めて相手に『勝ちたい』と思えたんだ。

S i d e : 織斑 一夏

じゅっ。

クラス代表決定戦が終わり、俺と篤は寮までの道を歩いていた。結果は全員一勝一敗だったので、判定で一位がセシリア、二位がシヨウ、三位が俺だった。セシリアは置いといて、俺とシヨウは僅差だった。千冬姉によると俺が結局セシリアに一撃も与えられなかったのが大きかったらしい。

「さっきから何だよ。」

先程から箒がこつちを見ており何か用があるのかと思い聞いてみた。

「負け犬。」

グサツ　　ぐあ。

何だコイツ。せつかく『きあいのタスキ』でHP1で耐えたにも関わらず次のターンに『はかいこうせん』を指示してくる鬼畜トレイナーさんか？

それとも自分のシールドもクリーチャーも0なのにさらにマナまで破壊しようとするえげつないデュエリストさんか？

それとも相手のライフはもう0なのにモンスターカードを引き続ける錯乱してたときの伝説のデュエリストさんか？

『悪魔は人の中にいる（デビルズ・イン・マン）』とはよく言ったものだ。そして俺がその体験者となるとは。

これはあれか？新章突入、急転直下、怒濤の展開、憧れのアニキとまさかの死別、新たな敵は自分の女！？地球の命運はお前の手に！お前の信じるお前を信じる！お前のドリルは天を突くドリルだ！——ってドリル持つてねえよ！

「ドリルねえよ！」

「……穴でも掘るのか？」

「……ああ、そして入りたい……。というかそのまま埋もれてしま

たい。マジで……。」

大事なことなので二回言ったのだが箒に変な目で見られてしまった。

見るな！そんな哀れむ様な目で今の俺を見るな！ 穴があったら入るだけでなく埋もれたいとはまさにこのことか。

「…話を変えるが、その、なんだ、負けて悔しいか？」

「まあな。」

「こ、今度からはISの訓練もいれないとな。」

「だな…。」

はっきり言って自分でもこのままじゃダメだと思っている。

「そ、その……コホン、い、一夏は私に教えてほしいのだな……？」

「まあ他の女子よりは気が楽だからな。」

「そ、そうかそうか……。ふふっ仕方がないな。」

なんか急に嬉しそうになった。何か良いことでもあったのか？

「では、明日からは必ず放課後は空けておくのだぞ。いいな？」

「おう。」

「ふふっ。」

すると篤が笑いながらスタスタと先行ってしまった。少し不気味だ。何なんだ？あいつは。

S i d e : シ ョ ウ ・ フ ル ゴ ー ル

疲れた。

今俺は自室のベッドの上で寝そうになっている。決定戦が終わり俺はすぐに寮に帰り、ベッドにダイブした。まあ有言実行だ。(↑オルコットとの試合開始時に『すぐに終わらせて帰って寝る』宣言をしていた。) この程よい睡魔に襲われ、寝るか寝ないかの境目をウロウロする感覚は堪らない。

なのにそんな俺を揺さ振っているヤツがいる。

レイだ。俺の睡眠を妨げるなんて万死に値する！

「ほら起きて。ご飯食べに行くよ。」

「無理…。今いいとこ……。」「

「もうっ！」「

「シヨウ起きかたか？」「

ミライさんがログインしました。

「まだだよ……って炎璃先に行っちゃうの！？ ちょっと待ってよ！」「

炎璃さんがログアウトしました。てか炎璃いたのか。静かだから気付かなかった……。

レイは追いかけて行ったらしい。これで安眠が手に入る。

なんて考えた俺は甘かった。小中学生のとき給食にあったあの

砂糖たっぷりの揚げパン以上に甘かった。ちなみに俺は食べる前に出来るだけ砂糖を落とす派だ。

スタスタスタスタ

「…はい。…これ……。」

「おお、その手があったか！」

「結構えげつないな……。」

どうやら炎璃とレイが戻ってきたらしい。まったく、俺の安眠を邪魔するな。こっちは疲れてるんだ。

「とう！」

パクッ

俺の口に何かが放り込まれた。オブラートと、それに包まれた何かだ。どんだけ起こしたいんだよ。

ん？ オブラートが溶けて中身が出てきた。この独特のツンとする風味は……って――

「いっ　　つ~~~~~~~~!!!!」

痛い！ は、鼻が――

「これ山葵わかいだろ――！」

「…シヨウ、山葵好きだし……。」

「だからってこの量は無いだろ!!」
「少なくともチ。ルチヨコの体積よりはあった。」

「まあいいじゃない。目も覚めたことだし。」

「覚め過ぎて釣りがくるぞ!!」

うま。棒一本を千円札で支払うくらい。昔一本十一円で売って
たところでそれをやったら店員がどうやら新人だったらしく、何度
もミスって泣きそうになってた。

「ほらシヨウ、早くしろ。」

半分強制的に連れていかれる俺。

……不幸だ……と言うと、とあるどこかの人に『そんな程度じゃ
まだマシだ!そんな不幸のうちになんか入らねえ!もしお前が
まだそれを不幸だと言いやがるなら、まずはその幻想をぶち殺す!
!』とか説教されそうなので黙っておく。

「おお、シヨウにミライにレイに炎璃じゃん。　　そうだ。お前達も一緒に食べようぜ。」

食堂にて一夏と篠ノ之に遭遇した。一夏がニコニコして食事を誘ってきた。だがそれを聞いた篠ノ之は不機嫌そうになり、一夏を睨んでいた。

そういえばこいつら表情が反比例してるな。一夏がニコニコしてるときは篠ノ之は不機嫌だったり気が弱くなって、篠ノ之がニコニコしてるときは一夏は『こいつがよくわからん』みたいな表情をする。

お！　今日の焼き魚定食は秋刀魚だ。

「少し気になることが有るのだが……。」

篠ノ之に話掛けられた。

「何だ？」

「その……この人たちは？」

「ああ、俺の幼なじみだ。」

とりあえず自己紹介タイム。だが篠ノ之の聞きたかった本題はそれではなかったらしい。

「もう一つあるのだが…。」

「何だ？」

「フルゴールは一夏のように専用機を今日もらったわけではないのだろう？　なのに何故フィッシングをしていなかったのだ？」

「あ、俺もそれ知りたかった。」

うつ…。理由が理由だけに答えづらい。

「篠ノ之、俺のことは別にショウで構わない。」

「では私も筈と呼べ。」

「わかった。」

「……………」。

「……………」。

じ……………つ。
x 2

一夏と篠ノ之改め筈の視線が痛い。

「……んで何でなんだ？ ショウ。」

「うっ、それは……」

「それは？」

「……ホント、何でなんだろうな。」

がたたっ

みんながずっとこけた。

スパ~~~~ン！！

いち早く復活したレイのハリセンが俺の頭に炸裂した。って言うかそのハリセンどこに隠し持ってたんだよ。

「何言ってるの！ あんた受領する日に寝坊して面倒臭くなってそのままサボったからでしょ！？」

「……さらに言えばその後も面倒だとか言っただけならかきつけてた……。」

さらつと真実を言う二人。せつかく隠してたのに。

「そついえばショウのISはどこ製なんだ？ 白式は日本製だって千冬姉は言ってたけど……。」

さっきまで苦笑いしていた一夏が疑問を口にする。

その質問で一瞬だけ会話が止まった。

レイと炎璃が心配そうにこちらを見ている。ミライは何かを考えてるように目を閉じ、腕を組んで黙っている。

そしてその一瞬だけの沈黙が終わった。

「俺達のI Sはこの国家にも属していない。」

沈黙を破ったのはミライだった。

「『俺達』……？ ってことはお前達も専用機持っているのか？」

「ああ。」

「で、どこの国家にの属していないというのはどういうことだ？」

「俺達は国際I S委員会に所属している。俺達の機体もその技術グループが開発したものだ。」

今ミライが言ったことは嘘だ。前にもこういうことがあったからわかると思うが、俺達が所属している組織、『クロスウィング』の存在が世界に知られてはいけない。だからこれは俺達の『表』の設定だ。

それに俺達の機体には特別な意味もある。まあこれが『クロスウィング』が表にいらなくなった理由でもある。それは――

世界に存在しないことになっている469と472つ目のコアを使用している。ということだ。

「そうだったのか。委員会所属か……。」

「あ、そうだ。話変わるけど良かったらお前らも俺にI Sのこと教

えてくれないか？ 専用機も有ることだし。」

そのことを一夏が言い終わると、箒が凄い目で俺達を見てきた。まるで『コイツは私の獲物だ！』と言っているかのように。

「え、えーと……。」

レイがチラチラこちらを見ている。『どうするの？』的な目で。というか今日だけで俺の『相手の目だけで心情を理解するスキル』のレベルがだいぶ上がった気がする。

「めんどい。たまにならいいが。」

「そんなこと言つなよ。な。」

一夏がそう言うと、箒が今度は一夏を睨んだ。だが一夏は全く気付いていない。コイツ凄いな。

「そ、その……悪いけど毎日……。それに危ないし………なんというか私達の……心が？」

「？」

レイの言葉に首を傾げる一夏。

そいつをさらに激しい目つきで睨む箒。

そんな状況を口を挟まずただ見守っている炎璃。

我関せずで食事続けるミライ。

箒に睨まれている一夏心配するレイ。

なんというか…………結構めんどくさい状況だな…………。

S i d e : セシリア・オルコット

サアアアアア

シャワーノズルから熱めのお湯が噴き出す。わたくしは今日、今までとは違う二人の男と出会った。

一人は普段は冷めた態度をしているが、その奥に熱い心を持つ者。

もう一人は、まだ弱いが決して揺らぐことのない強い意志の宿った瞳を持つ者。

多分わたくしはその瞳に魅入られたのだと思う。

両親が事故で他界し、手元には莫大な遺産が残った。それを金の亡者から守るためにあらゆる勉強をした。その一環で受けたI S適性テストでA+が出た。それにより政府から国籍保持のために様々な好条件が出され、遺産を守るために即決した。その後、最新鋭機の運用試験者に選拔され、データを取るためこの学園にやって来た。そして出会ってしまった。今まで会った男とは違う彼らと。

「織斑……一夏……… ショウ・フルゴール……。」

彼らは強かった。そして自分がそのうちの一方に特別な感情を抱いているのがわかった。

「織斑、一夏………。」

その名前を口にしてみる。不思議と、胸が熱くなるのが自分でもわかった。

—— 知りたい。『織斑 一夏』という人間を。

こうしてセシリア・オルコットの学園生活が真の意味で始まった。

第5話 剣士の目覚め（後書き）

どうも。TOMATOMANです。読んでいただきありがとうございます。

セシリアさんが一夏くんに惚れてしまいました。作者は一夏くんのハーレムを崩す気はないので、まあポンポン落としていてもらいます。

さて、ここでいくつか補足を。

まず、ショウの武装の『コバルト・ソード』ですが、はつきり言うとかンダム00のGNソード？ライフルモードなし版です。

次にNDシステムのケーブルですが、アムドライバーのネオアムジャケットのケーブルみたいなものと思ってください。

最後にショウがセシリア戦で最後に叫んだアムドライバーの主人公がよく言っていた『Get Ride!』ですが、言わせてみたかっただけで特に意味はありません。エキ○サイト翻訳で意味を調べてみたところ「旅行を得てください!」ってでました（笑）。ですのでさらっと流してください。

「ride」じゃなくて「rid」だと「切り開く」的な意味があるのでカッコいいんですけどね。

長々と失礼しました。

最後に誤字、脱字、感想、意見などあればお気軽にお願いします。

第5・5話 レイの日常

それは一組のクラス代表決定戦が始まる日より一週間くらい前のこと――

Side:レイ・イフリート

どうも！ レイ・イフリートです！

趣味はかわいいもの集め、好きなものは甘いものです！

さて、自己紹介はこの辺にして、今隣にいる幼なじみ、皇^{コウ} 炎璃^{エンリ}と一緒に寮の廊下を歩いている。目的地は1026室、もう一方の幼なじみのショウ・フルゴールとミライ・タスク・シュバルツを朝食に誘おうと思っている。

でもシヨウはまだ起きていないだろうから多分ミライだけになり
そうなんだよね……。

もう！シヨウったら１５歳になっても子供みたいになかなか起き
ないんだから！

ガチャ

「おい、待てよ、箒。」

「ふんっ！」

シヨウとミライの部屋の隣の部屋から人が出てきた。あの人は知
っている。世界で初めてISを『公』で操縦した男だ。そのことで
世間から注目されていた。でもあくまで『公』で。シヨウとミライ
は前から操縦できていた。だけど混乱を防ぐために隠していた。そ
う考えると世間からちやほやされていた彼は少しずるい気がする。
だからって私達の所属上、本当ならシヨウとミライの方が早いもん
！とか言って注目を浴びるわけにもいかないんだけど。

ちなみに今もそのことは隠していて、シヨウとミライのことを知
っているのはIS学園と国際IS委員会と各国の上層部の一部だけ
である。

それはさておき、ドアをノックし、部屋に入る。

するとありえない光景がそこにはあった。

「ミライ」。とりあえずシヨウは置いてご飯食べに——って
シヨウ！？　なんで起きてるの！？　なんかあつたの！？」

な、な、な、なんとシヨウが起きていた！！　しかもある程度身
支度がしてあつて後は着替えるだけという状態。　そんなことは別
に驚くことじゃないんじゃない？　と思うかもしれないけど、普段の
シヨウの起床時間から考えるこれは相当凄いことだった。

「…雪降る…。」

これはさすがに炎璃も驚いているみたいで少し目を見開いている。

「…色々あつたんだよ。色々……。」

え？　色々って何？　何があつたらこうなるの！？　何か悩み事
でもあるの？　シヨウが悩みそうなこと……？　IS学園は男は三
人しかいないから肩身が狭いとかかな？　それとも逆に女の子だ
らけで理性が耐えられなくて……いや、シヨウに限ってそれはない
………よね……？　でももしそうだったら……！

「ほら、あと着替えるだけなんだろう？　早くしろ、飯行くぞ。」

「りょーかい。」

ミライに急かされ、すぐにシヨウは寝間着にしていたＴシャツを
手に掛け――

――え？

――脱いだ。

「ち、ち、ちよつと！ な、なんで脱いでるの！？」

「え？ だって着替えるから。」

び、びっくりした……。仮説どうりなのかと思った……。

そんな私をシヨウは不思議そうに見ていた。

そのままの状態で。

し、シヨウ、は、は、裸！？

「わ、私達が部屋出るまで待っててよ！」

「あ。」

ショウはそのことに今気付いたみたい。何で気付かないの!?

なるべく見ないようにし、炎璃を引っ張って部屋を出る。

ボタン

壁に寄り掛かり心を静めようとする。

な、な、何でこんなドキドキしてるの!？ 上半身だけだからまだセーフじゃない？ ほら、男の水着って上ないし。

「……………それに小さい時は、一緒にお風呂とか入ってたんでしょ？
……………」

そうそう……………あれ？

い、一緒にお風呂ってことは、こ、こ、こ、混浴ってこと？ し、ショウと私がこ、混浴!？ 私達ただの幼なじみなのに裸の付き合い合いだなんて……………え!？ 裸の付き合い!？ そ、そ、そ、そ、そ、それって……………

レイは、心を落ち着かせるどころかどんどん変な方向に思考をヒートアップするのであった。

実はさっきから心の中で考えてたことがブツブツと小さく声に出ていたり、それを聞いた炎璃が横槍を入れたことなどには気付いていなかった。

そんな絶賛混乱中のレイを見て炎璃は、

(……面白いからそのまま見てよ……。)

と、放置するのであった。

数分後

ガチャ

「待たせたな。飯に――」

「バカあツ!!」

パシン!!

部屋から出てきたシヨウを、レイがいきなりビンタした。

「な、なんだよ、いきなり。」

「あ、謝りゆいなひゃいよ!」

レイの思考は、ショートしきっていて使い物にならなくなっていた。

レイが顔を真っ赤にしたまま放ったそのカミカミの言葉を聞いた

炎璃は無表情を装っていたが、心中は笑いをこらえるので必死だった。

「さっきのまだ気にしてたのかよ。」

「……………」

「何赤くなってるんだよ？」

すると部屋から出て来たミライがレイに近付き耳元でささやく。

「ショウの裸（上半身のみ）なんか見せられたら気になって惚れてしまうから責任れ、ってことか？」

レイの顔がさらに赤くなる。

「ち、違っわよ！そんなんじゃないわよ！（……………うん…そんなじや、ない……………よね。）」

ミライが悪戯が成功した子供のような顔をする。

「じゃあ、裸の件はさっきのビンタで報復したとして、ショウは何について謝ればいいんだ？」

「そ、それは……………」

ミライが追い詰めた的な顔をする。

それに対してレイは必死にミライの尋問から逃れるための言い訳を考える。そこでレイの視界の隅に何かが映った。

(……猫?)

レイにはちらっとしか見えていなかったが、怯えているのか全然動いていない。

(これだ!)

ここでレイの頭の中の電球がぴかっと光った。

「べ、別に私に謝れって言ったわけじゃないの。この猫によ! ショウのせいで私が騒いじったから怯えちゃってるじゃない。」

レイはそっぽを向きながら指を差した。ショウは、それは結局レイのせいなのではないだろうか、とか思いながらその方向を見る。

(……………。)

ショウは絶句した。

ここでレイは違和感に気付く。

ここは屋内、更に言えば寮だ。ペットを飼うのは禁止なはず。なのに猫がいる。これはおかしい。

レイは改めて自分が指を差した方を見てみる。そこにあつたのは

(……ぬいぐるみの……猫……！？)

そのことを知った瞬間、レイの顔が更に赤くなった。

(今の私めちやくちや恥ずかしい人じゃん!!)

レイは真っ赤なまま固まっている。
そしてショウも立ち尽くしていた。

(……俺はどうすればいいんだ……?)

ぬいぐるみに本気で謝っているところを周りの人が見たら、確実にショウは痛い子と思うだろう。

「えーと……レイさん？ それぬいぐるみなんじゃ……。」

レイはショートしている頭を必死に回転させるが間に合わない。

（ええ〜い！もうどうにでもなれ！！）

「は、早くして！」

「え？だが――」

「いいから――！」

レイは顔を赤くしながらじっとシヨウを睨む。

「……はい……」

レイからの圧力に耐えられなかったシヨウは、渋々ぬいぐるみの猫に謝ることにした。

その『ぬいぐるみにまじめに謝る』というシュールな光景に、ついに炎璃は吹き出してしまった。

通り掛かった人達は案の定、シヨウを可哀相な人を見る目で見ていた。

余談だが、このあと通り掛かった布仏 本音が、

『あゝ。みいちゃん、ここにいたんだゝゝ。』

と言いながら、シヨウからぬいぐるみを取り、すたすたと去っていった。

S i d e : レイ・イフリート

「……はあ。」

私は思わずため息をつく。

ぬいぐるみの猫に謝れとか……後から思い出すと、シヨウには悪い事したなと思う。

今、私は登校してシヨウ達と別れて自分のクラスの四組に向かっ

ている。

ガラガラ

「おはよう。」

「あ、イフリートさん。おはよう。」

あ、反応してくれた。しかも名前まで覚えていてくれた。まだ二日目でこの対応はすごく嬉しい。

なんて思ってたらなんか一気に人が寄ってきた。 な、なんで？

「イフリートさん、一組の片方の男子と二組にいる男子と幼なじみって本当！？」

それって言ったの今日の朝なのにもうこんなに伝わってるなんて……（詳しくは第三話を見てね）。噂って恐ろしい。

「どうなの？イフリートさん！」

「う、うん、そうだよ。」

クラスがざわつきだす。

「いいな、そういうの！」

「ねえねえ、その二人ってどういう感じの人なの？」

「フルゴールくんが今日の朝ぬいぐるみに話し掛けてたって本当？」

「二人って彼女とかいるの？ それともその二人が……？ いいわね……じゅるっ」

「そ、そんなに一辺に聞かれても……。 っていうか最後の人おかしいよ！」

キンコンカンコンコン

「ショートホームルームSHRを始めますよ。席に着いちゃってください。」

救世主、我らが担任の小早川先生が登場。少しダラつとした喋り方が特徴。噂によると元代表候補だとか。

「えーと、今日はまずこの時間でクラス代表を決めたいと思います。そんなわけでやりたい人いますか？」

シーン

ですよ〜。

「はい！ 一番強い人がやればいいじゃないですか？」

元気に手を挙げたのは隣の席の宮越さん。

「一番強いヤツ？ う〜ん……よく比較してないからわからないな〜。でも専用機持ちならこのクラスには二人いますよ〜。」

先生のこの発言によりクラスがざわつく。

「それって誰ですか？」

「更識さんとイフリートさんです。」

これってちよつとヤバい雰囲気？

「じゃあ、その二人のどちらかでもいいんじゃないですか？」

「じゃあ、私はイフリートさんを推薦する！」

「私も！」

「私は更識さん！」

やっぱり……！ ここで意志をはっきりさせとかないと！

「私あんまりやりたくない——」

「イフリートさんがいい人——!」

む、無視された! しかも宮越さんちゃっかり多数決取ってるし!
! とうかそんなに仕切ってるなら宮越さんが代表やればいいで
しょ!?

「あゝ、言い忘れてたけど更識さんは代表候補生です。」

—— え? そうなの?

「じゃあもう更識さんで決まりじゃん。」

「いやゝ、びっくりだね。早く言ってくればいいのに。」

ありがとう先生!! 先生は私の救世主だよ!!

そして更識さん、ごめんねゝ

時は移ってお昼休み。私は幼なじみズと一緒に食堂にいた。

「……クラス代表になってしまった…。」

「……右に同じ…。」

ミライと炎璃がクラス代表になってしまったらしい。専用機持ち
は辛いねえ。私もだけど。

「うちのクラスに代表候補生がいてよかった。」

更識さんにはホント悪いが、この二人を見ているとつくづくそう
思う。

「シヨウはどうだったんだ？」

「俺は来週戦って決めることになった。断りたかったが俺は強制参加らしい。」

おお！ 一組は随分と面白いことになってるじゃない。

「特訓するなら付き合っよ？」

「別にいらない。勝つ気ないからな。」

な〜んだ。つまらない。まあこう言っていながら最終的にはちゃんとやるんだろうけど。

そんなことを思いながらパフエを頼張る。う〜ん。ここの食堂のレベルはすごい。やっぱり甘いものはいいいね！ 体重？そんなの後でなんとかできる……よね。いや、してみせる！

「君って噂の一年一組のコでしょ？」

「あん？」

気が付くとシヨウが話し掛けられていた。リボンのいるからして三年生だ。っていうかシヨウ、その返事って……。相手は先輩なんだから。

「代表候補生のコと戦うんでしょ？ 私がISのこと教えてあげよつか？」

「めんどいんでいいです。」

即答！ それはもう見事なくらい即答だった。

「…………君、代表候補生舐めてない？ さっきもう一人の噂の口にも声掛けてみたけど、もうコーチ見つけていたわよ？」

「…………でもそんなことしたら俺のゴロゴロタイム削れちゃうじゃないですか。」

「——は？」

先輩が聞き返す。

「ゴロゴロタイムが削れちゃうからいいです。」

シヨウは淡々とした態度で再び言う。

シヨウにとっては代表候補生に勝つことよりもゴロゴロすることの方が優先順位が高いらしい。

「睡眠時間くらい削らないと代表候補生には勝てないわよ？」

「睡眠じゃないですよ。ゴロゴロです。」

「そんなの一緒じゃない。」

「……………何言ってるんですか？先輩。まさか本気でそんなこと思っ

てるんですか？」

シヨウの態度がさっきとは一気に変わって、少し怒っているように思える。

「別にいいじゃない。どこか違うの？」

その一言を聞いてシヨウは信じられないといった表情をしたあと、大きな溜め息をつく。そして――

「先輩、失礼を承知で言わせて頂きます。

あなたは今までの人生で何をしていたんですか！？ 馬鹿なんですか！？ そんな違いもわからないなんて人としてオシマイですよ！？」

いいですか？ ゴロゴロというのは――」

シヨウによる『ゴロゴロと寝ることの違い講座』は昼休みいっぱいまで続いた。

その間、先輩はずっと立っただけであり、少しかわいそうだった。

日は沈み、時刻は九時。

私は例の幼なじみズとの大富豪（またの名を大貧民）でミライと一騎打ちとなった末負け、飲み物を買ってくるようパシられている。

むむ……。やっぱりあの勝ち方はひどいと思う。

炎璃が一番に抜け、その後にショウが抜けた。この時点で私三枚、ミライ九枚でミライの番。ちなみに私の三枚はダイヤの12、ハートの8、JOKER。これはもらったわ！って思っていたのにその幻想は幻想殺しも無しにあっさりと打ち碎かれた。

イマジンプレイヤー

ミライはまず革命をした。でもまだ大丈夫。その次にミライはダイヤの4を出し、これで決まり！と私はJOKERを出したが、ここでまさかのスペ3返し（JOKERをスペードの3で返すことができるというルール）。

そして残りの三枚は11のスリーカードと、ほとんど何もできずに負けてしまった。

ミライめ、負けない戦い方なんてして……。

自販機のある場所に着く。するとそこには先客がいた。

「あ。」

「……………」

同じクラスの更識さんだ。

「……………」

「……………」

うう、気まずい……。更識さんの犠牲により私はクラス代表から免れたようなものだ。謝った方がいいのだろうか。

更識さんは緑茶を買い、部屋に戻ろうとする。

「あ、あの、更識さん。」

「……………何？」

なんか反応が冷たい。やっぱり怒ってるかな？

「あ、あの、……クラス代表のこと何だけど……なんていうか、その……ごめんなさい。」

「……謝られても……それに、…もう終わったこと、だから……。」

「ありがとう。」

「……………」。

「更識さん、先生が代表候補生って言うてたけど、どこの国なの？」

「……日本……。」

「そうなんだ。」

「……………」。

か、会話が！ どうしよう。できれば数少ない専用機持ち仲間として仲良くなりたいけど……。

そう思っていると、今度は相手の方から話し掛けてきた。

「……あなたは、専用機持ちなのに、…代表候補生、じゃない……
……どこかの企業に、所属しているの……？」

「私は企業じゃなくて国際IS委員会に所属しているの。ちなみに親が関係者で私の専用機はその技術部で作られたんだよ。」

表向きはね。と心の中で付け足しておく。

更識さんはそれを聞いて驚いた様子を見せた後、何かブツブツと専用機がなんたらかんたら、と呟いていた気がした。

「……私、もう帰るから……。」

「うん、じゃあね。」

第一印象と違って、結構いい子なんだなと思った。でも何より、話し合いが出来たことが嬉しかった。

さて、お使い、お使いっと。

えーと、ショウがファ。タで、ミライがQ。〇、炎璃が……

……あれ？ コカ。ーラ社の自販機がない……。

翌日、私は昨日とは違ういつものシヨウ（なかなか起きない、いつものシヨウということ）を起こしているミライを朝食に誘い（シヨウは起きないから置いて行った）、登校して四組に向かっていった。

ガラガラガラ

「おはよう。」

「あ、イフリートさん。」

「イフリートさん、おはよう。」

そのまま自分の席に移動しようとしたのだが……。

なんかみんな集まってきた。きよ、今日は何!?

「イフリートさん! 一組の男子二人と代表候補生のコが戦ってホント!？」

「ねえねえ、フルゴールくんって強いのか?」

「……………一組のどうしがペアってのもいいわね。どっちが攻めなのかしら…………。」

ま、また質問攻め!?

っていつか最後の人おかしいよ!

クラスがその一組の戦いが話題で盛り上がる。

もしかして私、こんな感じで毎日男子の情報聞かれるの？

「……はあ。」

私は小さく溜め息をついた。

第5・5話 レイの日常（後書き）

更新遅くなっちゃいました。ごめんなさい。

今回はレイ視点の話です。時間は3話あたりです。

うう、うまく書けない……。もっといい文を書けるように頑張ります。

ここで申し訳ないお知らせです。

書き始めたばかりなのですが、作者の諸事情によりしばらくの間投稿を不定期にさせていただきます。

でもやめませんよ？

一ヶ月に一回は投稿したいな。

誤字や意見や感想などありましたらよろしく願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7967w/>

IS<CROSS WING>

2011年10月30日18時10分発行